
魔王と勇者のタクティクス

kamome23

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王と勇者のタクティクス

【NZコード】

N7366X

【作者名】

k a m o m e 2 3

【あらすじ】

本が読むのが大好きな青年がいた。

そんな青年が突如穴に落ちた。

そこには、薄気味悪い塔には似合わない一人の少女がいた。

そして突然「私たち……魔王軍を救ってください」といわれ、

そして青年は返事をして……

勇者の役を買って出た青年と魔王の娘が作り出す。

とても壮大な戦略とは・・・・・!?

ハーレム要素がかなり強いと思うので苦手な方はご遠慮してく

ださー。

第一話 「てか……魔王の娘が勇者を召喚してやるいだろ……！」

俺の名前は、両羽巧といつ。

学校行きながらでも本を読み。

帰つて来ても本を読むそんな生活を送つてゐる。

ちなみに愛読書は「孫子の兵法」だ。

そんな読書好きでさうに戦略本や兵法書などをこよなく愛す。俺は、時々生まれてきた時代を間違えてんじやないかと思つときもある。

そんな俺は、今日も孫子を読みながら、学校からの帰り道を歩いていた。

「兵とは国の大事なりつてね、ああ一度でもこいからこんな時代に行つて兵隊を使いたいな～」

そんなことを考えて歩いていたため田の前に大きな穴があるのも気づかなかつた。

「わあ～～～

そのまま俺は落ちて行つた。

時は少し迫のまゝ、

「えーとまづは、河童の涙に……」

薄気味悪い塔には似合わない水色の髪の少女がいた。

「えーと次は…竜の糞…うわくそ！」

周りには誰もいなくてただ少女が必死に何かの準備をしていた。

「あとは、この黄金をつと、これで勇者を呼び出せる。」

その少女は目が輝いていた。

彼女の名前はエリス。

なんと魔王の娘。

「うんしょ、うんしょっとあと少しで完成する。魔法陣で勇者を呼び出して救つてもらわないと……」

エルナは、必死に混ぜて

「できた！」

ついにできたのだった。

それを周りに流し込んだ。

「よし完成した！」

周りには、紫色の魔法陣が描かれている。

「今ここに召喚の儀式を開始す。勇者を現世界へと呼びたまえ。」

上に大きな穴が開いた。

「わあ～～～

突然大きな声にびっくりはしたが、一人の男が落ちてきた。

「この人が勇者様……」

「いてて、なんだこりは？」

周りを見渡すと、薄気味悪い石でできた部屋の中にいた。

あなたは勇者様なのでですか？？

「まあ、うーん、何が？」

タクミは、状況が呑み込めず。ただ突っ立っている。

「あなたがです」

備力！！

〔メモ〕

タクミは、いきなり勇者と言われても何のじとかよくわかつていな

し
!

勇者を呼び出す儀式を行ったのです。

卷之三

エリスは、泣きそうな顔をしながら言った。

「和たせ」魔王軍を救ってくたわい」

その寺タクミは、

その時久松三郎は急に腰を直す。さすがに困惑して、

「はい、そうです。」

「え～と何で？」

「私のお父様の魔王が、神族の裏切り行為にあい。死んでしまいました。そして今私が魔王の代理をやつています。」

タクミは、目の前のかわいらしい少女が魔王の娘なんて信じられなかつた。

「はい、それで、そのために私たちは、最後の希望を託して勇者様をここに召喚したのです。」

「てか…魔王の娘が勇者を召喚しちゃまずいだろ…。」

「確かに」……

顎に手を添えて納得したような顔になる。

「いまじろかよ……」

タクミはこのかわいいらしげ魔王様に呆れていた。

「しかし…そんなだけピンチなんですね…。」

「どれくらいやばいんだ！？」

「魔王軍は、分散してしまい今私のもとここにいるのせ、たったの5千です。」

涙ぐんだ田で行つてくれる。

「5千でもすごいな、もともとどれくらいたんだ！？」

「100万です」

「はあ！100万！…どれだけ減つていいんだよ！！」

100万という数字を言われてタクミは、腰を抜かす。

「ほめたり、怒つたりどつちかにしてください」

「いや、だつて……なつ！」

「なに憐れんだ田で見てるんですか！！」

「仕方ないだろ！」こんなこと聞いたんだから。

エリスがタクミに詰め寄り

「それで助けてくれるんですか？？」

「それは置いといてだ。もし俺が帰りたいと言つたら返してくれるのか？？」

「それはちょっと……召喚はできたのですが、戻すのは……」
下を向いて返事をする。

「やっぱりな」

タクミはため息をついた。

「『のまま、『にいるしかないんだから協力してやひつー』
ものす』」と喜んだ顔で

「本当ですか！？」

「ああ」

「やつた――――」それで百人力です
手を挙げてバンザイのポーズを何回もしている。
「いや……ちょっと待て……俺は力なんて強くないし武術なんて少しか
じつたことがある程度だぞ」

自分の手を組んで広げる動きをして

「えつ……じゃあ、一撃必殺技とか、半径5キロメートルを焼き切
くせる魔法とかは？？」

「おこおこ、どんだけ勇者に夢見てるんだよ……」

「本当ですか！？」

「本当だ。俺は腕っぷしは弱い……ただし作戦を考えるのは得意だ
ぞ」

「そうですか……しかし、『に』で勇者を復活できたといわないと士
氣にも影響が出ますしつ……」

エリスが目をつむりながらせきててきたのに負けた巧は

「わかった。わかったよ、勇者の役やつしてやるよ……」

「嬉しいです！」

エリス踊っている。

「まあそんなに喜ぶなよ期待できるほど強くないんだから…」「それでもいいです！！」

タクミは、何かを思い出して物ふけな顔をする。

「まあいいけど、置いてきた妹が心配だな」

「妹さんがいるんですか？」

「ああ、俺とは正反対の感じで、腕っぷしが強くて戦闘になつたら真っ先に突っ込んでいくようなやつなんだが…いれば楽なんだがな…」

タクミは四人家族で武道家の父親にアクション女優の母親から生まれてきた。

なんでこんな親から俺が生まれてきたのか不思議で仕方ないとタクミは思っている。

「召喚では、呼びませんし仕方ありませんよ」

「私の名前は、エリスです。」

「俺の名前は、タクミだ。よろしくな」

「よろしくお願ひします。」

エリスは、考えて

「それなら、静かで安全な場所を求めるつていうのはどうですか？」

「そうだな、まあいいや。それより田標は？？」

「田標ですか？？」

「そうだ。何事の居ても田標があつたほうがいい」

エリスは、考えて

「それなら、静かで安全な場所を求めるつていうのはどうですか？」

「はあ～～そんな甘いこと言わずにもつと大きな田標もてよ…！た

とえばこの世界を奪つてやるとか

「そんなのいやですよ…」

よっぽど嫌だったのか、語気が強くなる。

「つべこべ言わずにもう決定した。よし田標は…」

タクミは、リストのことを少しだけ考えて

『世界をぶんびいで静かな世界にでもするーーー。』

やつして、魔王と勇者が手を組んだ。

第一話 「全員、川に飛び込め……！」

「世界をぶんぢって静かな世界にわせるつてなんですか……」
エリナがとても怒ったような顔をしている。

「いやーだつて、エリス言つたじやないか静かな場所を求めてるんだろ」

飛んだり跳ねたりして髪を上^{じやう}下^げさせながら

「そうですけど、それと世界をとるは関係ありません。」

「いや、手つ取り早い方法だ……！」

タクミは押し切る。

「どこかですが……もういいです」

「ふく
脹^{ふく}れた顔になつてしまつた。」

「そんな事よりエリス今の魔王軍の状況を教えてくれ
「そんなん聞いてどうするんですかー」

まだすねている。

「世界を取らないといけないからな！」

さげすんだ目で

「まだそんなこと言つているんですか？今は神族によつて統治せ
られていて、それを人族が勝手に魔族を追い立てているんですから」

エリスの言葉や視線を無視し

「なるほどな！敵は神族かー！それなら人族を仲間にした方が手つ
取り早いな！」

「何勝手に話を進めているんですか……！」

「よし、これで倒す相手は、神族からだな。」

「もう人の話聞いてくださいよ！」
エリスが腕をぶんぶん振っている。

「まあそれより。この世界って魔法があるのか？」
「はいありますよ」

ちよつと語気がすねている感じに聞こえる。

「例えばどんなんがあるんだ？？」
「そうですね」攻撃魔法から、防御魔法、補助魔法、儀式魔法なんかがメジヤーですね」

そこらへんは俺のいる世界のRPGと変わりないな…
俺のいるじゃなくて俺のいた世界か… いって悲しくなる。

「なるほど、次に兵種は？」

次々とタクミが質問するがエリスは、仕方がないという感じで返答をする。

「今味方にはいるのが、ゴブリンとかスケルトン、リザード【ウイッチがいます。】

「それぞれの特性は？？」

「えーと、『ゴブリンが棍棒と』が武器で……スケルトンは、防御が最弱だけど何回でも生き返れる。そして、リザードが頭がよくって。ウイッチが魔法使いつて感じ。」

「なるほど」

「よつする」、

ゴブリンが雑魚歩兵。

スケルトンが「」。

リザードが指揮官タイプ。

ウイッチが魔法攻撃つて感じか……意外に心もとない魔王軍…

「本当はまだほかにもいるけど、どつかに行つちゃつた」

「それなら、これから仲間にすればいいことだから大丈夫だ。」

「仲間につて本当に世界を取るつもり?」

エリスは、タクミの言つていることを鵜呑みにできなかつた。

「ああ本当だ」

「変な勇者を呼び出しちゃつたよ〜〜」

「お前が呼び出しておいて嘆くなよ」

タクミが拳骨（ゲンコツ）を一発かます。

「いつた―――暴力反対だよ!…」

エリスは、頭を押さえている。

「本当に魔王の娘なのかこいつ……そんなことはさておき次は敵だ。まずは一番の目標である。神族について教える!…」

「はいはい」

エリスが諦め顔をする。

「神族は、一番トップがオーディンでその下に11人の部下がいる。その部下がワルキユーレで騎士と魔法使いがいて、攻撃力防御力ともに高い。」

「ちょっととまて…それってかなり厳しくないか…」

「そりなんだよ!あと神族はみんな空を飛べるから

「なに!空からの攻撃ありだとどんなにチートな種族なんだよ」

タクミは、神族と戦う場合そういうの被害をもたらすと考える。

「でも、神族はあまり戦いに介入しない。」

「それは、本当か? ?」

安心したような顔になる。

「うん、人族が神族の配下になつて魔族を攻めているの

「なるほど…それで敵の本拠地は? ?」

「神界」

エリスがたつた一言ボソソッとつぶやいた。

「神界！？深海じゃなくてか！？」

エリスに詰め寄る

「そうです」

「それなら攻めようがないじゃないか」

「うん…でも一応地上の拠点があります。」

エリスが言つてから考えもせずに

「よしそこを攻略する目標に入れよう

「本気ですか！？」

「ああまつてるよ～～神族！～！」

片手を上にあげる

その時ゴブリンらしき奴が慌ててこちらに来た。

「大変です。魔王様！！人族の襲来です。どうすればいいでしょうか？」

「なんですって！！」

エリスが青ざめる。そしてタクミがさつき話していることを思つて出し

「おいおい、5千もいるの簡単に突破されすぎだろ？」

疑問をぶつけてみる

「いや、主力は河口において来てします。今は50しかいません。」

「はあ50！～おいそこのゴブリンA～敵兵力は！？」

タクミもこの状況に内心焦る。

「ワイは、ゴブリンAじゃないジヨンだ。」

「名前はどうでもいいから敵兵力は？」

「約一千！」

「どうしましょ～～タクミさん」

瞬間に作戦が思いつく。

「それならいい作戦があるぜ～」「なんですか」

エリスが目を輝かす。

「孫子の兵法にも書いてあつたが、敵が十倍以上の場合は、逃げるべしつてな」

「それって……」

エリスは、わかつてしまつたがわかりたくない顔をする。

「おうそうだ！――」そこから逃げるぞ――！」

「でもどこに？？」

エリスは、タクミが逃げるといつたのでどこに逃げるか不思議だつた。

しかし、タクミはさも自然化のよつて

「たしか河口に主力がいるんだろ」

「そうです。でもそこまでの道が敵に包囲されていて川しかありませんよ」

「それなら川を下るしかない」

「どうやって船とかありませんよ？」

エリスが考へている川を下る手段は、船しか思いつかない

「俺に任せろ！――とにかく撤退だ――」

「どうすれば……」

ゴブリンAは困っていた。

「タクミさんに従つて川まで逃げます。」

エリスは、タクミにかけてみるとこにした。

勇者として呼び出されたタクミを・・・

「へい！」
ゴブリンA^{ジョン}が走つて行つた。

「タクミさん川はこつちです。」

「おう！さすが頼りになるな！」

二人は、走つて外に出て周りにいた魔族とともに川へと向かつ。

2人 + 50人は、川にたどり着く。

川の広さは、そこまで大きくないが川の流れが速かつた。

「これからどうすれば？？」

「よし、魔王の娘なら魔法位使えるだろ？」

「はい！…」

「それならここらへんにある木を全部切つて川に流せ……！」
「できますけどどうするんですか？」

「みんなよく聞け、川に流されてる木にしがみついて流されろ～！
！」

タクミは、大声で叫んだ。

「本気ですか！？」

エリスも、タクミに負けないぐらいの声で言つた。

「本気だ！みんなは生き残りたいだろ？ それなら一緒に行こう～！
！」

この絶望的な瞬間をなくせる期待が大きかつたので賛成の嵐だつた。

「「「「「おお——————」」」」

この様子を見たエリスが

「本当にやる気なんですねわかりました。風の大きいなる力を鎌鼬かまいたちと
なれ！…」

その呪文とともに周りにある木が切れて川の上の空中を待つて着水した。

「さすが、魔王の娘だけあるな」
「それほどでも」
少しテレるエリス。

「全員、川に飛び込め　　！！」

「　　「　　「　　「　　「　　おお――――――――――――」」」」」」

バシャーン

一斉に川に飛び込んでいく。

「エリス！俺につかまれ！！」
タクミがエリスと手を握る。
「えつ！えつ！」

「大丈夫だ死ぬときは一緒にだから――！」

「そんなの嬉しくもありません――ん――！」

バシャーン

そしてタクミとエリスは川の中えと消えて行つた。

第三話 「部隊編成をなめるなーーー！ 基本中の基本だぞーーー！」

「エリス！俺につかまれ！！」

「えつ！ えつ！」

一 大丈夫だ死ぬときは一緒だから！！

— そんなの嬉しくもあらまや — — ん!!」

そしてタクミとヒリスは川の中えと消えて行つた。

「エーヴィング... フルセイ... タク//ヤヌヘ...」

エリスが必死に木にしがみついている。ただし、魔法を使ってずいぶん楽な状況を作り出している。

「タク!! セニ デルヘ?」

エリスは木にしがみつきながら、周りを見渡そうとした。

「俺は……………だ！」

聞こえたほうを見てみると確かにいた。

「タクミさん大丈夫ですか？」

タクミは、ちよつと木と木の間に挟まっていた。

「本当にですか？」

「ああ大丈夫……いややつぱだめ、エリスもつ一本の木を飛ばしてくれ……」

「ええ……でも、誰かいたら困るじゃないですか……？」

「大丈夫だ誰もいないから！」

タクミはまつたく見ずに返事をした。

「本当にですね！？」

「早くしてくれ……！」

悲痛な叫びが水で響いた。

「もうわかりましたよ！風の理に^{じぶんぢぶん}おいてそれをつかやぶる突風となれ……！」

エリスがいつた瞬間片方の木が飛んで行つた。

「助かつたぜ～」

タクミはエリスと一緒に木へと移つた。

「なんだとばされてハリマンね～～～！」

なんか真上に向かつて飛ばされている物体がある。

「なんか聞いたことある声だな、あああの時のゴブリンAか……！」

「どうしましょう～～？」

エリスが慌てている。

「それくらいで死んじゃあそこまでだつたんだ。ありがとよ～ゴブ

リンA」

手を振る。

「死んでおりまへん～～！」

ゴブリンA^{ジョン}が、別の木へとしがみ付いて言った。

「おお生きてたか～～ゴブリンA～～死んだかと思つたぞ

「勝手に殺さん」といてやーーーあとわいは、ジョンやーーー」

「あどれくらいだ????」ゴブリンAの突つ込みを無視したタクミは、

「そうですねあと数分でしょうか」

「よし! その時が来たら、この木を飛ばしてくれ!!!」

「何でですか？」

タクの言ひてゐる如きを説く

信じることにした。

タフミガナ吉で云ふ。

「木を離して、泳いでけ―――！」

全員不満そうな顔をしたが、方法がなかつたため泳ぎだした。川岸には、味方らしき魔族が縄を投げたりしている。

—エリスしつかりつかまれよ！！

卷之三

ヒツヅトタガミ一
著

「
」

川の流れが思つたより強く流されかける。

タクミは、こんな時に運動神経が良ければと嘆く。

「エ...リスト...ふはつ...何とかしろ...」

「……そんな……こと……い……れ……ても……無責任な！」

「……いいから……はやく……魔法……を使え……！」

「……最初から……つかえ……ばよかつた……のに……」

タクミは、この世界で魔法を使えることをまったく頭に入れていないかった。

タクミが心の中で

「ここには、魔法を使えることを頭に入れておかないと」

と思つた。

突然軽くなつた。

「何で！？」

隣を見てみるとエリスに周りが光つていて

それで、タクミはエリスが魔法を使つたのだと気づいた。
タクミは、川岸に行こうと必死に泳いだ。

エリスを抱えて、

「あれ……重い……」

エリスを見ると周りの光が弱まつてきた。

「やばい！！」

タクミは、エリスの魔力が少なくなつてていると思つた。

「早くいかないと！――」

その後すぐに繩をつかんで何とか岸に上がる事が出来た。

「はあーはあー……大丈夫か？エリス？？」
エリスの様子を見るとぐつたりしていた。

「おい、起きる――」

バンバン

背中を思いつゝきり叩く。

そつすると、

「「ほっ！ げほっ！ いきなり叩かないで下さ」「よー！」

咳き込みながら怒つているエリスの様子を見て、ほっと一安心するタクミであった。

太陽が真上にあるから、曇ぐらいだな

「エリス様～～～～～！」

大声で叫んでいるトカゲみたいなのが一足歩行で歩いていた。

「ああジョージさん！」

「大丈夫ですか？ エリス様！？」

「はい何とか」

「あの…エリス。こいつ誰だ？」

「この人は、リザードのジョージさんです。昔から指揮を執つてもらっています。」

「なるほど」

「こやつは誰ですか？」

ジョージは、あやしい目でタクミを見た。

「この人は、勇者様です。」

「こんな、何も取り柄がなさそうな奴がですか！？」
訝しそうな目でタクミをまだ見ている。

「なんだ！？ リザード！？」

挑戦的な態度で打つて出るタクミ

「わしの名前は、ジョージだ！！」

「わかつたが、俺が勇者様だ！！」

「そうです。ジョージさん。この人が本当です。」

「エリスがタクミに肩入れしたので

「それなら信じましよう。」

ジョージは渋々頷いた。

「それで、生き残った人はどれくらいですか？」

エリスが聞いている部下思いな魔王様のなのだ。

「はい… 31人です。」

「そうですか……」

表情が重くなる。

「それでも、包囲された状況からみると、ましです。」

「そういうてくれると助かります。」

「さすが、頭がいいだけはあるな…」

「タクミさんこれから、どうするんですか？？」

「うーーんとまずは、部隊の再編だな。」

「そんなことするんですか？」

「部隊編成をなめるなー！！基本中の基本だぞーーー！」

「確かにそうですね… それなら賛成です。」

「ジョージさんも賛成なら…」

おそるおそる承諾するエリス。

「ああまずは、部隊再編からだーーーリザードロ一緒にがんばるぞーーー！」

「ジョージだーーー！」

そうして、無事生き残った魔王と勇者は、部隊再編を始めるのだった。

「何か最初からみみつちいな」

第四話 「神族つておつかないな……」

「それでですね。タクミ殿……言ひにくいことなんですねけど……」「何だ? ジョージ? ?」

「エリス様が、召喚の儀式を言つてゐる間に、魔王軍の大半が逃亡してしまつて、今800しかいなんですよ……」

「何でそのことを早くいわない! ! !」

タクミの叫びが木靈した。

「えつ! 本當ですか! ?」

「はい……エリス様今残つてゐるのは、古参の兵隊ばかりです。」

「そうなんですか……」

エリスが悲しそうな顔をする。

守つて行こうと思つてゐる矢先に集団逃亡したからだらう。

「それなら、別いいじやないか、それに残つてゐる奴らは、古参なんだろ! ?」

「そうですね」

「新兵が、どんなにいよつとも経験をつんだ奴らには、勝てないからちようどいいかもな。それで、残つた兵力は?」

タクミにとつては、過去より今のほうが対背だつた。

「はい、ゴブリンが600、スケルトンが100、ウイツチが150、リザードが50です。」

「なんか……スケルトンがすごい抜けているな……。よしわかつた、密に編成してくれ、戦闘部隊と特殊部隊、それに近衛部隊だ。」

「その……特殊部隊とは?」

初めて聞く言葉だらうから、簡単に説明をする。

「もつとも危険な任務をする部隊だ。だから、有能な奴を選んで、

そつから志願制にしてくれ。近衛部隊はエリスの護衛専門だからそこまで兵力をさかなくても大丈夫だ。」

「わかりました。エリス様は、それでよろしいですか？」

「はい、指揮はタクミさんに任せようと思うので…」

「それなら、ただちに編成をします。」

リザードンは、走つて消えてつた。
ジョージ

「なあエリスこの近くに町はあるか??」

「はいありますよ…でも何するんですか?」

「そりや、野宿はいやだから泊るところを探すんだ。」

手をぶらぶらさせて疲れていることをアピールする。

「なるほど……ってここの人たちを置いていくんですか！？」

「そりや、魔族がいつたら。即戦闘になつちまう、その分人族に見える俺たちなら大丈夫だろう」

「そうですけど…おいていくのは……」

とてもためらいがある様子で悩んでいる。

「大丈夫だつて」

「そうですか…」

「おい、そこのゴブリン」

「はいな」

また、同じ顔を見て

「つて、ゴブリンA生きていたのか??」

「先ほどは、ありがとうな、わいを飛ばしてくれて…」

笑いながら眉間に上げている。

「まあ…気にするな…！」

「気にするわ…！」

ジョンが近くにある角材を持った。

「二人とも落ち着いて」

取つ組み合いを始めようとしていた。

「魔王様に免じてゆるす。」

「誰がお前に許してもらわなあかん！…」

「もう……一人ともケンカしないでください……ジョンさん私たち
は近くの町まで偵察しに行くので、今日はここに戻ってきません。」

「おお～～魔王様に名前をおぼえてもらつた…感動や～～」

涙を流している。

「それじゃあ、とつとと行こうぜエリス」

「はい」

一人は、近くの町に訪れた。

「意外に広いな」

「そうですね～」

その時に橋を渡る一団がいた。

「あれは……」

一番偉そうな人が何かをしゃべっているのが聞こえた。

「くそつ、逃げられた！！せつかく魔王の娘を捕まえられるチャンスだつたのに…しかも、追撃したら木が降つて来て、退却せざる負えない状況になつたし……くそつたれ！…！」

「なんか…怖いですね」

「あれは、俺たちを追撃した部隊だな、それに見事に俺の作戦は成
功したな！」

「えつ！何のですか？？」

「お前に木を、後ろに飛ばしぐれって言つただろ。」

「ああ……確かに」

エリスが納得した顔になつた。

「それでの被害だな、たぶん。」

「へえ～意外に考えてたんですね

「意外にとはなんだ意外にとは…」

拳骨をくらわす。

「いったーい！ ほめたんですよ私！？」

「何かむかついたからな」

「理不尽な！？」

そうして、戯れているときに、突然空から誰かが来た。
甲冑で身にまとつた女性だ。

「何だあれば？」

「あれば…まさか！！」

エリスがビビッてる。

「おい、エリスどうしたんだ？？」

「あの人たちが神族です。早く逃げましょう。」

エリスは、俺たちを捕まえに来たかと思つてゐるんだ。

「なるほど、あいつらが…」

神族は、背中に羽を生やしていた。

「ちょっと待て、どうやら俺たちじゃなによつだぞ。」

「えつ…」

よく見ると、人族の隊長に向かつていた。

そしてその隊長が慌てて、

「何でございましょうか？ フレイヤ様」

「ヒリス、フレイヤって誰だ！？」

「フレイヤは、神族の一番槍と言われている人です。」

「なるほど、強いのか……」

「なんじは、人身売買や売春行為で多額のお金稼いでいたとは本当の事か？？」

フレイヤが、人族の隊長に問いかけていた。

そうすると、隊長は、青ざめた。

「い、いえ……何のことをおっしゃっているんですか？」

「そなたが、不正な行為で金を稼いでいるのか。と聞いている。」

「そんな事する筈が無いじゃないですか！？」

フレイヤが剣を構えた。

隊長が後ろに下がつて行つたが、橋の手すりにぶつかつた。

「オーディン様より、そなたが嘘をつかなければ軽い罰でよいが、嘘をついた場合殺せと言われている。」

「ひつ！…ひつ！…何で…！」

「お前に最後のチャンスを与えたのだが、残念だ。」

「つ…！」

次の瞬間。

隊長の頭が吹っ飛んで、体は川へと落ちて行った。

「肅正完了。そなたたち行つてもよいぞ」

後ろに待つて行つた兵たちは、みな走つてこの場から去つて行つた。

「エリス……神族はあんな感じなのか!?」

「はい、そうです。人族、魔族関係なしに、肅正していっています。」

「神族つておつかないな……」

タクミ自身、その光景を見ているときにつばを飲み込んでいたのに気付いていない。

フレイヤがこちらを見た。

俺は、一歩も動けずに固まつてしまつた。

そして、目線を上にあげて飛んで行つた。

「俺たちを見逃したのかな?」

「はい……たぶん……」

「「ひどなところはないで、さつわと行け」」

「そうですね」

二人は真つ赤な夕日が見える中、宿屋を探しに街の中へ駆け足で入つて行つた。

第五話 「……勇者が魔剣を持つかー？普通ー！」

「」は、ヴァルハラ宮殿。

神族の唯一の地上拠点。

そこには、大きな翼をもつた女性と、甲冑で身にまとった女性がいた。

「オーディン様ただいま帰還しました。」

甲冑で身にまとった女性がひざまずき、そう言った。

「よくやりましたね。フレイヤ」

大きな翼をもつた女性が返事をした。

「は、はい。もつたいなきお言葉……一つ報告しなければならないことがあります。先ほど訪れた町で魔法の娘ともう一人不思議な男がいました。命令になかったために放置しました。」

「魔王の娘ともう一人の男は、別の世界の勇者です。」
下に向いていた顔をあげて

「勇者！？すぐに殺した方がいいのでは？」

「大丈夫です。すでに対策を講じてあります。もうすぐ現れるでしょう」

「」

一人の少女が歩いてきた。

「まったく、バカ兄貴がいなくなつたと思えば、なんでか私までこんな変なところにいるのよ」

「来ましたか、ようこそ、ヴァルハラ宮殿へ」

初対面の人ケンカ腰に

「あんた誰？」

「私の名前は、オーディン。改めて歓迎します。両羽 千夏さん。

じょうは ちなつ

そして、両羽 巧の妹さん

そんなことを気にしていいかの様子で言った。

「何で私の名前と家のバカ兄貴の名前を！？」

突然兄の名前が出てきた少女は驚いた。

ヴァルハラ宮殿でどうなっているのか知らない一人は、宿屋を見つけて泊ることにした。

宿屋の中は、ぼろくてランプが一つしかない暗い場所。「今の状況じゃまずいな……」

椅子に座つてタクミはうなつている。

「だから、行つてるじゃないですか！無理だつて！」

エリスもこことばかしに抗議する

エリスの言葉を無視し

「まあ、それはおいおい考えるとして、魔法軍の歴史について教えてくれ。」

エリスは突然聞かれたので何事かと思っている。

「急にどうしたんですか」

「いや、何で負けたのかと思つて。」

「それは・・・」

物思いにふけりながら語り始める。

私は昔を思い出す。

私たち魔王軍はお父様の魔剣と采配をもつて連戦連勝をしていきま

した。

このまま人族に勝つかと思われたのですが、そこで現れたのが神族です。

戦つていると突然空が光り翼を持つ人達が下りてきました。

そして、私たちの軍のみを攻撃してきました。

その時は、何とか逃げ偽る事が出来ました。

そして、たびたび来る神族を撃退はしていましたが、被害が多く。

お父様は、神族、人族と和平を結ぶことにしたのです。

そして神族はそれを承諾して、この戦争は終わりを迎えたように思えたのですが。

その和平調印の場で、神族の主のオーティンがお父様を剣で後ろから刺したのです。

その後、すぐ戦闘になりお父様は何とか生きている状況でした。

そんな時私に、

「後の事は、お前に任せる。この魔族を栄えさせるのも滅ばすのもお前の好きにしていい」

と言つてくれました。

そして重臣たちに言葉を残してから息をしなくなり死にました。

その後魔王軍は、連敗の連敗を重ねて自然に崩壊しました。

生き残った少數の兵と共に私たちは逃げて、最後の希望を勇者召喚

にかけたのです。

「そこから、タクミさんと出合つて今といたるわけです。」

「なるほどなーこの話を聞くと神族が悪いみたいだな。」

タクミの言葉に反応してエリスが興奮気味に

「そうです!! 私の…私のお父様を殺して…」

「わかつたから落ち着けつて」

エリスは、はつとなる。

「すい…すいません。タクミさん

「事情はわかつたから。」

「それで……次に行きたいところが出来ました。」

エリスは突然、決意をした顔になる。

「行きたいところ?」

「今のは思い出したのですが、ここから西にある森に、お父様の使っていた。魔剣があるんです。それを取りに行こうかと思います。」

「

「魔剣!?」

「そうです。それをタクミさんが使えばこの状況を覆せれると思うんです。」

「俺が魔剣!?」

「勇者なので魔法などの素質があると思います。」

エリスの一つ一つの言葉には、迫力があった。

「……勇者が魔剣を持つか!?! 普通!?!」

「でも、これしかないんです。お願いします。タクミさん……。」

「わかつたから」

俺は相変わらず、女の子のお願いには弱いらしく。
だって男だもんしかたない。しかたないよね……うん。

「よし、明日には出発したいから今日はもう寝よつぜ」

「はい」

そして夜が明けた。

「それじゃあ、全軍に伝えてくれ日指すは魔剣が眠る場所だ……！」
魔王軍一同、魔剣が眠る場所へと移動を開始したのであった。

「本当に勇者が魔剣を持つていいのか……？」

第六話 「お前にみんなが付いて来てるだろー!？」

魔王軍総勢800人は、一路魔剣が眠る森へと進路を取っていた。

エリスとタクミは、徒步で移動している。

「なあ、エリス、馬はないのか？馬は～？」

まだ歩き始めて2・3時間しかたっていないのだがタクミは、すでに疲れた様子を見せ始めた。

「まだ、歩き始めたばかりじゃないですか！？」

エリスは、疲れなど一つも見せずに歩いている。

「ちかれた～～」

「まったく、それでも男なんですか」

余裕満々な顔をして言つ。

「そんない俺は、元いた世界では、アウトドアのひきこもりで町では通っていたんだから！」

「アウトドアで引きこもりっておかしくないですかーー？」

エリスがもつともらしことを言つた。

感慨深い顔をして

「外に出るのは好きなんだが、趣味がなくて引きこもりでばかりだつたからな」

「引きこもつて何してたんですか？」

「本ばかり読んでたかな」

「ちょっとびっくりして

「本ですかーー？今のタクミちゃんには一番似合わないですねーー」

言つてから、エリスは殴られるかと思つて頭をガードしたが殴つてこなかつた。

「そ、う、か、も、な、」

予想外の言葉にエリスは驚いた。

「確かに俺は変わったのかもな……ここに来て上

タクミは、今まで親父たちに囲まれていたせいか普通じや考えられない体験を何度もしてきた。

その中で本を読む行為は、心が静まつたために好んで本を読みふけていた。

そんな生活を送っていたタクミからしてみれば、全然みたいな生活もありなのかなと思う。心があるのかも知れない。

「タク//さん……」

エリスは気まずそうな顔を作る。

「何暗い顔になつてゐるんだよ！お前は笑つてゐるかアホなことして
ればいいんだよ」

「アホな」とってなんですか!「アホな」とって…」

「 もう 一 タクシーやるよ~」

エリスは微笑んだ。

何たよ

ちょっと照れたタクミであつた。

その後小休憩を取りつつ進軍していく、あと四分の一まで差し掛かつたところで空がオレンジ色に染まり、太陽が沈みかけたために野営することになった。

「食料とかは、大丈夫なんだろ？」

「はい、あと2、3週間分はあります。」

「しかし、なんでそんなに準備がいいんだ？」

タクミは、敗走してきた魔王軍にしては、武器や食料が多くある。

「それはですね…魔王上に会つた秘宝やお宝をすべて売つたからです。」

苦笑いをする。

「それは、凄いな！お前もなかなかやるなー」

タクミがエリスの事をほめている。

「…そんなことないですよ…ただみんなの事を考えてですね…そうしたほうがいいかなーなんて思つただけなんですか？」
もじもじしながら返答をした。

「何照れてるんだ？俺はそこまでしてお金が欲しかったのに驚いているだけだぞ」

タクミは、ほめたことが照れ臭かつたのでごまかした。

「そんなひどいです。お金なんていりませんよ！」

「じゃあ、俺にくれよ」

ポケットから巾着みたいなものを出してきて

「今これだけしか…」

チャリン出てきたのは、銀貨3枚だった。

「まじか？」

「はい…」

タクミが銀貨3枚をこれでもかつていうぐらご眺めた。

「本当にこれだけか？」

もつ一回確認する意味も込めて聞いてみる。

「はい… そうです。」

「これからどうするんだ？」

「どうしよう～」

「質問を質問で返すな…！」

タクミは内心呆れはしたが、エリスはぬけついぬといふがあるなど
思った。

「これからいつ魔剣を取つてから考えましょ～うよ…ね！」

「まかすように早口で最後の『ね』をやけに強調させた。
「はあ～お前も人のことが言えな～くらいいい加減だな
「そんなことないですよ～」

やけになつたように反論してくる。

「いやいや、そんなことあるだう。自覚してないだけだろ
「そんなことないです。」

二人がいがみ合つてゐるところに

「（）飯出来ましたよ……」

おそるおそる、骨人間が話しかけてくる。

「うん？ 誰だこいつ？」

「私は、スケルトンの骨子といいます。」

「そのまんまだな」

見た目通りの名前だ。

「わかりました。すぐ行きますね」

骨子は、どこかに行つてしまつた。

「エリス、さつきの事は水に流そつか

「やつですね。流しちゃいましょう」
よつやく一人の意見が一致した。

食事中

「いひつ感じもいいな」

周りでは騒いでいてとても楽しい感じになつていて。

「そうですね。私もそう思います。」

エリスも周りを見ながらつぶやく。

「私は、こんなみんなの笑顔が見たくて戦っているのかな～って思う時もあります。」

「そつか……軍を率いる者の心構えとしては十分だな

タクミは、にやつと笑う。

「何で笑うんですか？」

「これから、勝てる気がしたからだ。」

「勝てる気が？」

エリスが首をかしげる。

「お前にみんなが付いて来てるだろ！？」

「でも……私なんて軍を率いる資格なんてないですよ……」

落ち込み気味な発言をしたエリスに向かつてタクミは、

「エリスが軍を引っ張つていけ、そして俺がお前の頭となつて引っ張つてやるから心配するな。」

タクミがやさしい笑みを見せながらエリスに言つたため。

エリスは、呆然としつつ頬が少し赤くなる

「何ですか？急にそんなこと言ひだして」

「エリスにこれだけは言ひたかったからな」

「そうですか」

そうして、月の下で一人は、仲をより仲良くなり、魔王軍は踊つて舞つた。

朝日が見えるところに・・・・

「大変だ～大変だ～人族の部隊が来た～」

偵察に出ていたゴブリンが慌てて伝達してきた。

「ふわあ～～～寝み～」

あぐびを殺しながら髪をぼさぼさとかいでいる。

「そんなこと言わずに、どうするんですか？」

自信満々な顔で

「昨日行つただろつ、俺がエリスの頭になつて引っ張つてやるつて

「やつですけど……」

タクミは立ち上がり

「よし、人族を迎え撃つぞ！！」

魔族と人族の戦いが始まろうとしている。

第七話 「全軍停止…！」のまま陣形を整えひー！」

タクミ達は、敵の兵力を探るため最初に偵察を出した。

そして1・2時間したら偵察に出したゴブリンが返ってくる。

「兵力はどれくらいだ？」

「1000後半ぐらいです」

あいまだが、見ただけで数を数えるのは難しいから仕方ない。

「倍ですか……」

エリスは、タクミの方を見る。

「倍だな！よし、今から作戦を言つゞぞ」

タクミは、兵力など関係ないかのような雰囲気を出している。

「大丈夫なんですか？数も不利ですし、地形も左右が山に囲まれて

いて、一本道みたいなところなんですから」

不安の要素がたくさんあつたためエリスは、大丈夫なのか心配している。

「ああまかせとけ！」

タクミは、魔剣の事しか想えていなかった。眼中になかったのだ。

敵の事など……

場所が変わつて、人族の軍隊。

「申し上げます。敵は、前方に陣を張つておひ、横長い陣を引いておひります。数は、不明です。」

若い偵察兵が指揮官の所まで来る。

「なんだと！ どうしてもつと、詳しく調べなかつた。それでは、兵力もわからんではないか！」

戦いをはじてているというのに、右手にビールのジョッキをもち、イスに深くもたれかかつている人物がこの部隊の指揮官が言つた。

「くそつ！ これでは、作戦がたてれんではないか！」

机にジョッキを思いつきり置いた。

その音に驚いた若者は、そそくさと出て行つた。

そして、横に控えていたいかにもエリートの士官学校を出ましたみたいな人が指揮官の前にきた。

実際そうなのだが。

「魔族におそるに足りません。ここは兵力で押していきましょう。」

「まあ、そうなんだが」

指揮官は、経験上では危ないと思つたがこの参謀は有能なことから士官学校から派遣されてきたためある程度は言つことを聞かなければならぬ。

「ふむ、お前に任せてみよ」

「ははつ、ありがとうございます。それでは、横一列に並んでいるので三つに部隊を分けてそれぞれぶつけていきたいと思います。指揮官の目が少し大きくなる。

「部隊を三つに分けるのか……まあいいだろ。編成もお前に任せる」

「わかりました。お任せください。」

そうして、若い参謀は出て行つた。

「グスバルね……あいつは使えるのだろうか？」

グスバルと呼ばれる若い士官は、着々と準備を開始した。

そして、匂過ぎのころグスバルは、部隊を三つに分けてそれぞれ、歩兵同士の戦闘が起きるかと思つたが、敵は逃げて行つた。

「ふんっ、やはり魔族なんてただのクズだな！」

そして、顔のおでこあたりに手を置き笑つている。しかし彼自身きづいていなかつた。

これがすべて読まれていることを……

山の中に、大勢の兵力と一人の人物が潜んでいた。

「やつぱり、こう来たか」

タクミは、笑つているまるで獣を追いこんでいるような感じで

「タクミさんどうして、三つぐらいに部隊を分けるなんてわかつたんですか？」

ちよつと疑問を持ったのか小声で聞いている。

「それは、横一列に並んでいるときに一番気を付けないといけないのが、横からの挾撃だ。そしてそれを効果的に防ぐために、分散させてのだろうがあの部隊の指揮官か参謀の腕はそこで終わりだ。本質を分かつていない。」

「本質ですか？」

頭の上にはてなマークが浮かんでいる。

「ああ、部隊を分けるって事は兵力を分割して数が少なくなつてい

る。だから隠れている部隊でも十分に対応が出来る。」
「利だよなスケルトンって」

タクミは、スケルトンがただのゴミだという考え方を改めた。

ただしエリスからするといいくら死なないからと言つても捨て駒みたいに扱うことを少しためらつていて。

「まだ…なんですか？」

スケルトンの人たちをかわいそうに思つたエリスは急かすようにタクミに話しかける。

「もうちょっとだ……」

そして、山の中でひつそりと息を静めていることを知らないグスバルは、勝てると確信したために慢心している。

「そのまま押し切つて！……！」

そのまま勝てるかのように思えた戦場。

しかし、グスバルの見た光景は、悪夢だつた。

三つの部隊のうち、左右の部隊が魔族によつて攻撃されていたのだ。

「魔族にあれだけの兵力があつたのか！？」

確かに目の前の光景は信じられないことが多いだらう。

「申し上げます。」

傷だらけの兵がこちらに方向を持つてきた。

「中央の部隊からですが、敵主力だと思われていた部隊は、少數しかいません！！」

その兵士が悲痛な叫びが戦場に流れる。

「そうか……」

グスバルは、敵の戦術に見事にはまつたことに気付く。

そして、愕然とする。

少し^{とき}時は戻つて

「あと少しだ。落ち着け～」

タクミはエリスの肩に手を置きながら言つ。

「落ち着いてます。」

先ほどの雰囲^ひ気とは変わつていた。

そして、敵部隊が真横に来たところで

「全軍！突撃！～」

「「「「「「「おお――――――」」」」

雄叫びが鳴り響き魔王軍は、敵部隊に向かつて攻撃を開始した。

そしたら、その勢いにのまれて押されて中央に人族の軍が集まり、だんだんと包囲される形が出来てきた。

三方を囲んで、後ろだけ開けている三日月型の陣形が完成した。

「なんでも、後ろを開けておくんですか？」

エリス達は、全体がある程度見える丘に来ていた。

「それは、困むと敵が追い詰められたと自覚して最後の奮戦をしてこちらの被害が多くなつちまう。でも、一か所だけ開けておくとそこに逃げると思つてどんどん逃げてくれるから、その後ろから攻撃したほうがこちらの被害が減るからこの陣形なんだ。」

「なるほど」

エリスは、納得した顔を見せた時にタクミの言つた通りに敵は逃げ始めてこちらが追う形となつた。

敵を散々追い回して途中で

「全軍停止……」のまま陣形を整えろ――

タクミの言葉で敵を追つのをやめ始める。

「こんなもんでいいだろ？。」

タクミは、魔王軍の強さを確認できた意味でも今回の戦いは有意義だった。

「そうですね！」

エリスは、タクミの作戦がしっかりとあることを知つて内心驚いている。

いつもボケツとして何にもできそつになつようにしているのに今のタクミは、単純にいくつも作戦を考えてしまつと実行しているところがす”こと思った。

「いのまま、一気に進もう。魔剣の眠る森までー。」

タクニの言葉で全軍は動き始めた。

第八話 「おひおい、言わと」ひちやない……

グスバルは、逃げて行つている部隊を見て何も言えなかつた。

「グスバル、お前の慢心が招いた敗北だな」
いつの間にか指揮官の男が来ていた。

「すいません。ゴルバ殿」

頭を下げて誤つてゐるがその顔はくやしさで唇をかんでいる。

「ゴルバ、この戦いは惨敗で終わつたにも関わらず、ゴルバは次の機会を狙つていた。

「次は、俺が指揮をする」

「次？」

「次ですか……」
今回の戦いは惨敗で終わつたにも関わらず、ゴルバは次の機会を狙つていた。

「ああ、もうすぐで増援の部隊が1000人、来ることになつてゐる。それと今の部隊を合わせて再度叩くぞ……」

ゴルバは自信満々で魔王軍の事を狙いつつ退却するのであつた。

一方魔王軍は、そのまま魔剣の眠る森へと進んでいた。

「魔剣ってどんなものなんだ？」

二人が並んで歩いているときにタクミが聞く。

「お父様が持ついたものです。名前はダーインスレイブと言います。」

「ダーインスレイブ……」

「名前からして魔剣っぽくタクミ自身持てるのか自信がなくなっている。」

「これは、お父様から聞いただけなんですが、なんでも戦場を一瞬でか減る事が出来るらしいです。実際お父様の攻撃で戦場が変わるので何回も見てきましたから」

「戦場が一瞬で……」

タクミは、その魔剣を手に入れれば魔王軍をかなりいい所まで立て直せると確信した。

「それじゃあ、速く取りにいかないとな」

「もう、待ってくださいよ～タクミさん！」

タクミの歩幅が大きくなり駆け足気味で歩いていくにエリスは後ろからついて行く。

夕方あたりに差し掛かり野営することになった。

本当なら今日中に着く予定だったが戦闘をしたために一回休息を取る必要があったのだ。

「あと、少しだな」

タクミは、もう少しで魔剣の所に行けるといつ高揚感に浸っていた。

「もう、子供見たいですよ。タクミさん」

エリスは、そんなタクミが面白くて笑う。

「タクミさん、少し頭を冷やしに行つてきた方がいいですよ」

「… そうかもな」

タクミ自身とても興奮していることに気が付いたので

すこし、雑木林の中へ行く。

「しかし、本当にありえないことだらけだよな…魔剣とか魔法とかRPGだけかと思ってたのにな」

そんな風に感慨にふけていると

「助けてください…!!」

急に女人のかわいらしき叫びが聞こえた。

「うん…これ、前に聞いたことがあるよつな…」
少し考えてみてもわからなかつたためいつて見ることに、
そして、腰にかかっている剣の鞘の部分を持ちながら声のする方へ
向かつていつた。

「助けてください…!!

月明かりが木によつて防がれており少薄暗い林の中にその人物がいた。

「お前は、骨子か…！」

前に、飯の時に呼びかけてくれたスケルトンの骨子がいた。

「…で…何で頭だけなんだ。」

骨子は、頭蓋骨の頭だけこちりを見ていた。

「私が転んで体がバラバラになっちゃったんです。」「バラバラ……」

周りを見てみると、確かに骨らしきものが散らばっている。「タクミさん、直してください……」

頭蓋骨の口の部分だけが動いていた。

「これを、直すのか……」

周囲には、三ヶタ行くのではないかと思えるぐらいいの骨が散らばっている。

「お願いしますよ~~~~~」

「いや……俺には無理だ。ありがとうな骨ナ。」¹飯のとせに読んでくれて

タクミが後ろを向いて帰ろうとして

「ちょっと待ってくださいタクミさんひどくあります。」

骨子の叫んでいる。

「私なんて戦場でも体に触れるだけでバラバラになつてその後に体中を踏まれるだけな存在ですけど助けてくださいよ~~~~~」

「それは何でいうか……残念だな」

タクミは、振り返つて言う。

「残念でもいいですから助けてくださいよ~~~~~」

骨子の口がカチカチ言つてこる。

「ああ、わかったよ！」

そつして、タクミは、骨子の修理を開始した。

「えーと、ここは、これでいいのか？」

「違いますよ~なんで手と足が同じとこりへりへりつてこるんです

か
く

「ああー面倒くさいーーー！」

その後ちょっと直していく

「ふう――終わつた。」

「いや、骨子の体が戻ったのだ。
いつたい何時間かかったんだよ……」

「タカラヅカ、おつがいのアリ二番目。それでね、一ぱいで

骨子は走つて去つていいく。

一
おへ
傳子御ひへるべく

「キヤ！」

骨が散らばる音がした。

「お二様、言わんといつたらない」

田の前には、骨子の骨が散らばっている。

「タク//さ――――ん――――!」

「わかつたよ直してやる」

その後さつきと同じ通りに直していく

「やあがに一回やつた」とあるだけに早く終わつたぜー」タクミは、口のことを自分で語つてなんだか切なくなつた。

「ありがとう」
骨子がお礼を言つ。

「ああ、ゆつくり帰れよ」

そのまま、骨子とは別行動をとつた。

「大丈夫かなあいつ……」

タクミは、骨子のことを少しだけ心配した。
でも、

「スケルトンの組み立てに慣れても得ないな……」
ちょっと損したようなよくわからない気持ちになつた。

戻つていくと

「タクミさん……どこ行つてたんですか！？」

エリスは、心配そうな顔をした。

「ああちょっとな……」

エリスに心配させることに申し訳なさを感じるが骨子の事はあまり話したくなかった。

なんせ二つちに来て一番疲れたことだからだ。

「やうですか……」

エリスは、小さくうなづいた。

夜が更けて行く。

第九話 「…つてお前が俺を呼ぶ魔法を教えたのはー!？」

ヴァルハラ宮殿では、一日休んだ千夏がオーディンに会いに来ていた。

「おはよー。千夏さん。」

オーディンは、前回会った時とほとんど同じ位置にいた。

「それで、決めてくれましたか？」

まっすぐとした視線で聞いてきたため、

千夏は

「はい、決めました。私は、バカ兄貴を連れ戻す！」
こぶしを握りしめた。

「わかりました。しかとその覚悟を受け取りました。それでは貴方には、人族の部隊を率いて魔王軍と戦ってください。」

「私が指揮をとるんですか？」

千夏は今まで一度も指揮なんてとったことがなかつたので心配だつた。

「大丈夫ですよ。あなたにならできます」

「つ！」

千夏は、震えた。内心をオーディンに悟られたからだ。

そして、体の中にもとて冷たい何かが残つた。

「あなたに渡したいものがあります。」

そうして、オーディンが後ろから持ち上げたのは、長さが2メートルぐらいあるでかい大剣だつた。

千夏は、オーディンがもともと渡すために後ろにおいてあつたので私の心を読まれたとかそんなことを考えたが、目の前の大剣に心を

奪われた。

「……」

何も言えないほど何かすごいものを感じ取った。

「これは、聖剣エクスカリバーです。」

「……エクスカリバー……」

「太古より、邪なるものを倒してきた聖剣です。あなたにはこれを使つて魔王を倒し兄を取り戻してください。さあ、こちらに……」

そして、千夏はオーディンからエクスカリバーを受け取る。

「軽い……」

持つてみて重いと予想したのだが以外にも軽かつた。

「それは、あなたに聖剣がなじんでいるからです。」

「なじむ？」

首をかしげる

「エクスカリバーがあなたを認めたのです。使うことにどんどん強く使いやすくなるでしょう」

「そうですか……」

「それでは、あなたはブリュンヒルドを付けてあげます。」

そうして現れたのが金髪のショートヘアの女性だった。

「オーディン様。何なりとお申し付けを」

ブリュンヒルドはひざまずいている。

千夏はその様子を立つたまま眺めている。

「そなたには、そこにいる千夏さんを助けてもらいたいのです。」

ブリュンヒルドは、ひれめずいたまま千夏の方を見た。

「かしこまりました。」

「それでは、千夏さん、ブリュンヒルドよろしく頼みますよ
オーディンはその言葉を残すとそのまま何も言わなくなつた。」

そして、二人は出て行つた。

妹に狙われているとしらないタクミは、魔剣の眠る森に着いた。

「はあ――やつと着いた――……つてここで会つてゐるのか！？」
タクミの田の前に広がつてゐるのは、昼にもかかわらず薄暗い森だ
つた。

「はい、せつです。」

エリスはくくと首をふる。

「まじかよ……もつとお城とかとてでもかいお墓にありますとかそ
ういう設定はないのかよ！――」

「タクミさんは、いつたい何に期待してゐんですか？そんなのすぐ
に見つかって取られちやうじやないですか！」

「ああ、そうかよ」

タクミは頃垂れる。

「もうそろそろ來ると思います。」

エリスは、誰かを待つてゐるかのよつなそぶりを見せる。

「誰がだ？」

「ここを守つてゐる部隊です。」

「ここを守つてゐる部隊です。」

「ここに部隊がいるのか兵力はどれくらいだ？」

タクミにとつて兵力を増えるのは願つてもないチャンスだった。

「確かに1000人ぐらいいたような」

エリスは指を額に添えて考えて言った。

「1000人ってどこでいるんだ？」

見た感じ薄気味悪いただの森しかなかつたので不思議に思つていると

「エリス様おひしゃしゅづびでこます。」

そうして現れたのが魔法使いみたいな服を着ていかにも怪しい宝石をついた杖を持っているよほよほのおじさんが出てきた。

「ジョンじい！久しぶりです。」

そうして、エリスとジョンじいは、ばぐをする。

「だれだ？こいつ？？」

タクミが不思議そうな顔をする。

「この人は、リッチのジョンじいです。お父様に古くからつかえていて。私の魔法の先生です。」

「リッチっていうのは？？」

リッチというのがわからなかつたタクミは聞いた。

「魔族の中で一番魔法が使える人たちのことを言います」「なるほど」

紹介されてジョンじいがタクミの前に来る。

「ふおふおふおーーエリス様は、召喚の儀式に成功したのですね」「はい。」

「…つてお前が俺を呼ぶ魔法を教えたのは！？」

ジョンじいを指でさしてタクミは驚く。

「そうです。ジョンじいが起死回生の魔法として召喚の魔法を教えてくれました。」

エリスがそういうと

「お前のおかげでこいつは巻き込まれたんだぞ……。」

タクミは、叫んだのだがジョンじいは、無視する。

「わしの魔法間違えたかの～」

手を顎においてさすりながら言った。

「何だとこのじじい！俺を読んでおきながら……。」

タクミは、食つて掛かる。

「一人とも落ち着いて、タクミさんの指揮のおかげで一回も救われています。」

「それならよいのじや、それでエリス様要件は、魔剣を手に入れることでいいのですか？」

さも、先の話はどうでもいいかのようにエリスと話す。

「はい。」

エリスははつきりと頷く。

「この男に適性があるのか楽しみじゃのうー」

不気味な笑いを浮かべている。

「それじゃあ、行きましょうタクミさん」

エリスがタクミの袖を引っ張る。

「ああ……」

タクミは、ジョンじいの言つてることに疑問を持ちながらエリス共に深い森の中に入つて行つた。

そして、小さな穴があった。

「ここです。」

エリスが指をさしている

「ここか……」

中の様子は良く分からぬが不気味なオーラを感じる。

「それでは、タクミさんこれを持つて行ってください」

そうしてエリスは、タクミに灯のともつたろうそくを一本を渡す。

「これから俺一人か？？」

「そうです。頑張ってください」

そうしてタクミは、穴の中に入つて行く。

「けつこうつな。広さがあるな」

周りを見渡すと人が一人ぐらい余裕でとおれる道があった。

「あそこか……」

急にひらけた場所に出て目の前に周りに術式みたいなものが書かれているところで剣が浮いていた。

「これが、ダーインスレイブ……俺の物にしてやるよー。」

タクミは、手を触れた。

そうすると突然闇に包まれた。

「なんだ？」

「お前は、誰だ？」

声が聞こえた。うす気味悪い声が・・・・・

「私は魔王だ。」

いきなり魔王に会つたのだった。

第九話 「……つてお前が俺を呼ぶ魔法を教えたのはー!?」（後書き）

感想や評価などを待っています。

第十話 「まさか……魔王！？」

「私は魔王だ。」

「えつ！！」

声は聞こえるのだが姿がなかつたため内心で焦つていたがなるべく顔に出さないように心掛けた。

「それでお前が魔王か……」

いかに干 稲方慶三九郎

「此の隕石が何であるか知らぬかねか？」

「まあ、やハ無Nな少J語Jゆる」

「何のだ？」

弱弱しい声で言われたためタクミは、少し引く。

「……ああ、元気だぞ。魔王軍をしつかりと引っ張つて行つていい。」

「そうかそうか、さすがは私の娘だな！」

なんか声が明るくなっている魔王を見てタクミは確信した。

「お前、親バカだろ……」

魔王がちょっと焦った声で

「何バカなことを言つていいんだ。ただ……娘を可愛いと思つて当然だろ……なあーお前もそつ思つだろーー」

「まあ、確かにかわいいな……」

「可愛い……だと……」

少し変な間が流れた。

「お前！私の娘に何かしたな！！あまりにも可愛いからつてやつてもいいことと悪いことがあるぞーー今すぐこお前を消してやる」

「えつ……ちよつと、Hリスのお父さん……こきなり消すつてないんじやないですか……」

いきなり怒られたタクミは、焦りつつ逃げる場所がないためどうじよもできなかつた。

「あ、お前なんかにお父さんと呼ばれたくないわーー汚らわしいーー」

「ひつちだつて、お前がエリスを生んだことが不思議だよーー」

タクミは何かむかついたために反抗している。

タクミ自身泣されると言われて黙つてはいられないのだらう。

「何ーわしを愚弄するどいりか娘の悪口を言つのかお前はーー」

どいにでもいる親バカなお父さんみたいたつた。

魔王の威厳も何もそこにはなかつた。

「エリスがあの性格なのも頷けるな……こんな父親を持つたらな……

タクミはため息を一つ。

「ちよつと甘やかしきただけだ……」

ちよつと言い訳じみた感じに魔王がつぶやく。

「ちよつとじやないだろ絶対に！教育の仕方が根本から間違っているぞ…！」

タクミはなんか…立場逆転してないかなと心の中で思った。

「わしだって、心配で心配でこいつしてエリスが魔剣を取りに来るのを待つていてサプライズにしようかと思つておつたのにお前なんかむさくるしに男が来るとは思わなかつたわい。」

「サプライズって…死んでないのか？？」

「そうすると紫色の塊が出てくる。」

「体は滅びても魂はちゃんとあるからな」

タクミは触れよつとしたが触る事が出来ず通り過ぎて行つた。

「なるほど……で、お前はこの状況をどうとかじよつとしないのか

…

タクミは、今までとは違つ眞面目な顔をしていつたため、魔王はそれに答えた。

「わしは、死んだのだ。今は魂でしかない。だから、すべてをエリスに任せた。」

「エリスが大変な目にあつているのを知つててか！…」

「ちよつと興奮氣味で言つたため語氣が強くなる。」

「ああ、わしは全てをエリスに託したのだ。逆に信頼におけるだけの器になつたと思つたからだ」

タクミは、確かに今のエリスは軍を率いていけるだけの器はある。

「エリスは、苦しくても頑張つてたんだぞ！それを見ているだけか

「俺はエリスを助ける。だからとひとつ魔剣をよこせ……！」

タクミは、叫んだ魔王に向かつてだけではなく誰かに向かつて叫んだ……。

「わかった。お前の覚悟は、しかと聞いた。それではお前に素質があるか確かめる必要がある。」

魔王の魂らしい後ろに一本の剣が出てくる。大きさは、1メートル50センチぐらいだらつか、細いスリムな剣が出てきた。

「ただし、素質がなかつたらお前の命を食べてしまつ剣だ。この剣に認められたものだけが扱える事が出来る。お前にそのことを分かつているか？」

「そんな事、百も承知だ。俺は、エリスを助けるためにこの剣を取つてやる。」

タクミは、ここに来る前はただ本を読んだりして何も面白くない時間を過ごしていた。

それこそ太陽のように時間通り上がつて時間通りに沈んでいくそんな生活を送っていた。

でも、エリスがこつちの世界に呼んでから一変した。

まだ数日しかたつていないがそれでもいろいろなことが楽しめたことが何よりうれしかった。

楽しかった。

だからもととエリスと一緒に何かをしていこうと思つた。
これからもつと大きい事が出来ると思ったから・・・

「覚悟してやるよ」

そうして、魔剣を手に取ると、周りに黒い何かが渦巻いた。

しかし、怖いなんて思わなかつた何で少し暖かく感じた。

「これは……死ぬのかな…」

そう感じたのだが渦は収まつていき自分の手には剣がしつかりとあつた。

「ほお～～～ダーインスレイブが認めたかお前を……」

「手に入れたのか俺がこの魔剣を…」

剣を持つてみると意外に軽く竹刀を持った時と同じ重さだった。

「お前は面白いな！これから楽しみだ」

景気よく笑つて いる魔王。

「何でだ？？」

「お前は、魔剣に認められたのだからな」
言つて いる意味が良く分からなかつた。

「これは、楽しみになつた！」

ケラケラと笑う魔王だつた。

「そんじゃあ、俺は戻る。じゃあな」
「どうやってだ？」

確かに周りは暗闇に包まれている。

「そんなのこいつやるんだ！」

ダーインスレイブを一振りしたら周りがパリンといつ音と共に先ほ
どいた洞窟へと戻ってきた。

タクミは、洞窟から出ると

「タクミさん！！」

倒木の上に座っていたエリスが「ちら」と走ってきた。

「大丈夫でしたか！？」

心配そうにして来たのでタクミはダーインスレイブを見せる。

「ほらな！」

「それは、ダーインスレイブ……タクミさん手に入れれたんですね
！！！」

「ああ！」

二人して、抱き合って喜んでいたのだが、

「ワーン……ガウウウ————！」

何やらイヌかオオカミの声が聞こえてきた。

後ろを見ると、

(わしのヒリスに何するんだ)

タクミの頭の中に言葉が響いた。

「まさか……魔王ーー?」

タクミと一緒に元魔王の体長約一メートル後半のでかいオオカミが
出てきたのだ。

番外編 「寒いハロウィーンを過いしたのぞ」（前編）

番外編です。

本編とは、少しあしか関係ありません。

タクミは、13歳の時の夢を見ていた。

「兄さん！今日は、ハロウィーンだね！…」
まだ、小学6年生の千夏がこっちにくる。

両羽家では、大抵両親が不在なため俺がほとんど家事をしていた。

「ああ、そうだな。だから、今日はカボチャメインの食事にしてやる。」

その日がたまたま休日だつたために俺は、一日中かけて仕込みをしようと計画を練つていたのだ。

「樂しみだな～～～」

「お任せおけ」

俺は、そうして仕込みをするために材料を切ることにした。

「兄さん。今……朝だよ……お腹すいたよ～～～」

「ああ……忘れてた」

「兄さん時々そういうの抜けているからダメなんだよ。」

「「「めん」「めん」

俺自身、何となく楽しみにしていた。

親父たちがケチなために、いつも口しか、豪華な料理を作れなかつたのだ。

時々思う。

中学一年生が考える事じゃないよな……

「兄ちゃん～まだ――――――」

「ああ、『めん』『めん』

すぐ「元朝」はんを作った。

「「「いただきます」」

一人の声が家の中から聞こえる。

「どうだ!?」

今日は、ベーコンエッグを作つてみた。

「うさ。こつも通り!」

「わいか……」

作った俺からしてみるとこつも通りといつのが褒めているのかよくわからない。

「でも、お父さん達何してるんだ？」……

「ああ？ 今はどうしているんだっけ？」

「一人とも何でか知らないけど忙しい。

母さんは、映画の収録で忙しいのだろうが、親父が忙しいのは分からぬ。

ただ単に、一緒にいたいだけなのかもな……

「今は、確かヨーロッパのどっかにいるはずだよ」

「ヨーロッパか……」

「一人とも口ケ地になる場所にいろいろと言っているために、消息がつかみにくい。

「よし、気を取り直して夕飯作るか！」

「うそ、楽しみにしている」

妹の笑顔がまぶしくてやる気になつた。

- しかし、何で数年もしないうちに性格が変わったのだろうか……
- ・

今世紀最大の謎だ。

匂は、適当にカップラーメンを食べただけだ。

「うーん、チキンカレー味おいしいね！！」

「本当に……辛いだけなんだが、味が辛いっていうのも」

「これが、おいしいんだよ！」

「やうなのか」

妹との味覚の違いが分かった。

「チキンがカレーなんてダメだろ」

「兄さんつまらない…………」

『ぐわい』

カレーと辛れーをかけたのがつまらないと言われたのがショックだ。
渾身の出来だったのに。

食べ終わり。

また、作り始める。

そして、仕込みをしていたら。
あつという間に夕方になっていた。

「兄さん……本当にできるの？？」

「ああ大丈夫だ！！」

しつかりと、豪華な食事になると想つ。

『ピンポーン』

ドアホンの音が聞こえる。

「私出でぐるね。」

千夏が走つて行き、ドアを開けると

「こんにちは、ウルフ宅急便です。お荷物をお届けに参りました。

両羽 巧様で会つていますか」

「はい」

「おひさしだいを

……。

「ありがとうございます。」

……。

ドアが閉まる音が聞こえ、箱を持った千夏がこちこちに来た。

「兄さん。ねえことお母さんからだよ
「みだり」

「へえ～～珍しいな。せっぱりハロウィーンだからかな？」

正方形の中ぐらいの箱を持っている。

「」飯で来たから、食べたい。開けてみるか？」

「うん」

やつして、夕食が始まつた。

「わあ～～～おこしこわい。」

「どうだ。」

ちゅつと作りすぎた気がするが……いや、作りすぎだ。

これで当分、夕食を作らなくて済む。

その後、食べて食べて食べたが……会話は全くない。

「おこしかつた」

「おこしかつた」

「お粗末様です」

やつぱり、かなりの量が残ってしまった。

「それでは、開けてみよう。」

そうこうしたとどめに千夏が開け始めた。

「これは……ビーテオとカボチャだな」

開けると、カボチャの中にビーテオが入っていた。

「ハロウィーンと並べさせてだね。とにかくビーテオ見てみよ。」

「ああわかった。」

ビーテオテックの中にいれて再生ボタンを押す。

背景がレンガで作られた家などが写っている。
その前には、

「ああ、お母さんとお父さん……。」

母さんと親父が写っていた。

「わはつはは、元氣が、わが息子娘たちよ」

マッスルで、元氣120%のいつも通りの親父が[写]る。

「今、俺たちは、オーストリアにいる。」

オーストリアと言えば、音楽と芸術の都があるな。

「へえ～～～オーストリア《・》リアにいるんだ。」

「千夏……『ラ』はいらぬいぞ」

千夏が真っ赤になり。

「間違えは誰にだつてあるよ」

言い訳をする。

「He y! ! 巧に千夏。元氣にしてるーーー」

元氣で活発な声であこがりしてくるのは、母さんだ。

「それで、今私たちがいる場所わかる??」

「いや、オーストリアだろ!」

つい、ビデオレターに突っ込んでしまった。

「巧一、オーストリアだらつていつ突っ込みはつまらんぞ」

「えつ。俺の突っ込みが読まれた！…！」

「巧は、相変わらず。父さんには勝てないわね。正解を言つてあげて。」

「それはだな」

少し間を作つて。

「ハロー——ウイーンにいるや——俺達は——」

「え……」

「これは、寒い。

「兄さんまさか……」

千夏も気づいたようだ。

「どうだ。父さん渾身のギャグは、ハロウイーンの日に“ハロー”『ウイーン』にいるぞ。がはつはは」

笑い声が響く。

「さすが、笑いのツボ押さえてる。クスクス」

母さんまで一緒に笑つていた。

「それでは、またーー！」

そうして、ビデオが終わつた。

「何がしたかつたんだ……二人とも……」

「さあ～??」

ていうか、親父と同じことをした俺は……

はずかしいーー！

両羽家のハロウイーンは、こうして幕を閉じた。

「タク//セ起きてください」……」

エリスの大声でタク//は起きた。

「エリスなんだ??」

「いや、だつて何か無氣力そうで死にかけた顔をしてたから

「確かに……」

夢を思い出す。

「それでどうしたんですか??」

「寒いハロウィーンを過ぐしたのや」

「何ですか??」

「気にしないでいい

懐かしく思い出したくない夢を見た。

番外編 「寒いハロウィーンを過いしたのを」（後書き）

今日はハロウインなので、そのネタの過去編をひとつ書きました。

今後も過去編があるかもしないので期待してください。

話の途中でこの話を急に持ってきて下さいません。

第十一話「これから、新しく仲間になつたフエンリルだ。」

「まさか……魔王!…?」

タクミがオオカミを見てあの声が聞こえたために魔王だといふことがわかつたが、エリスにはどうやらあの頭に響く声は聞こえないらしい。

「タクミちゃんがいたんですか…?」のオオカミちゃん…」

エリスは、少し体が震えている。

そして、タクミの後ろに下がつて行つた。

（おおおーーーー！エリス！より一層可愛くなつてお母さんに似てきたな！）

またもや、タクミの頭の中に響く。

「魔王!…どうことだ！これは…?」

タクミが痺れを切らして大声で言つたのはいいのだが

「え！…魔王つてお父様なんですか！?」

エリスがすぐさま反応する。

（お前わしは魔王ではない！…ただの狼だ。それにエリスには私の正体を知られたくないから黙つてくれないか？？）

タクミは、そばに近づき耳元で話す。

「…何でだよ！?」

（理由はいいから、わしの名前はフエンリルだとでも言つておけー。）

「ああ、 もうわかったよ！」

「タクミもさぞびびったんですねか…？」

エリスが懐疑的な視線でこちらを見る。

「あはは、 いや、 忘れてたよ。 魔剣と一緒に仲間になつた。 魔狼のフーンリルだ。 」

タクミが堂々と嘘を言ひ。

それに乗つたフーンリルは

「ワンワン」

尻尾を震わせている。

「まったく、 ワンワンって犬かよ。 まったく魔王の威儀もくそもないな。 」

小声で嘆ぐ。

「やうなんですか！ よろしくねフーンリル！ ！」

エリスの目を輝かせて、 フーンリルに向かつて走つて飛びつき抱きしめた。

「よく見たら可愛いかも～！」

「ワン！ ワン！ ワオオオーーーーーーーー！」

なんかフーンリルも喜んでいる。

「はあーーー。 本当に魔王なんかいじつ……」

親子のスキンシップなのだが……

とタクミは内心嘆ぐ。 勝手にやつててくれとタクミは思った。

「エリス。 今日、 ここで野営をするからみんなに伝えてくれ
「はい、 わかりました」

エリスは、 タクミの言葉を聞いてテクテクと駆け足で軍のみんなに

伝えに行つた。

タクミがフェンリルの方を見る。

「これは、どういうことだ？」

（そのままの意味だが）

やはり、頭の中に響く。

「この声は、俺にしか聞こえていなようだが何でだ？」

（それはだな：わしは、さつき言ったように肉体はないが魂は残つていた。それで今まで魔剣に縛られてたからな）

「縛られる？」

タクミは聞きなれない言葉に首をかしげる。

（魔剣といのは、意志がある。わしは、あまりにも魔剣に好かれてしまつて、死なせてくれんかつたは！－がはは）

オオカミ自体は、息が淡いのだがタクミの頭の中には笑い声が響いて少し不愉快に感じる。

「事情は、わかつた。それで、お前もついてくるのか？？」

（もちろんだとも）

「そりかよ……どうせダメと言つてもついてくるのだろ！？」

（もちろん！－）

タクミは、ため息をつきながらフェンリルと一緒にエリスのもとへと歩いて行つた。

そしてエリスの前に行き。

「これから、新しく仲間になつたフェンリルだ。」

「ワンワン」

そういうて、フェンリルを紹介した。

一方の人族は……

「ゴルバ様、増援部隊が到着いたしました。」

「うむそうか。これで魔王軍を粉碎できるわー！…がつははー！」
机を叩きながら豪快に笑っている。

そして、その横に控えていたグスバルもかすかに笑っていた。

そうして、人族は魔族への再戦へと意気込むのであった。

「ブリュンヒルドだつけ？こんなにも兵隊をくれるの？」

千夏は、陣織の中でブリュンヒルドに訪ねる。

「そうです。しかし、千夏様先ほど通りかかった部隊も魔王軍の所へ向かっていたようでしたがよかつたのですか？」

兵力はざつと3千。

ブリュンヒルドが言つていたことは、ゴルバの部隊がちょうど横を
通つて進軍していったことだ。

進軍中の一人の兵に聞いてみればこれから魔王軍の所へ行くと聞けば
ばなおさら部隊を徴集すればより多くの兵力なつたからだ。

「たぶん、指揮系統がバラバラになつて自滅すると思うからそれな
ら別々で行動したほうがいいからね。」

千夏は、はつきり堂々と返答。

「それなら、よろしいのですが……」

ブリュンヒルドは、不満そうな顔になる。

「それより、私の部下つていうことでいいのね？」

「はい、オーディン様がそうおっしゃったので…」

「そう……」

千夏は、このブリュンヒルドを信用できなかつた。

千夏自体、オーディンと神族を信用していなかつたが兄貴を連れ戻せれるというのがあつたためにこの状況に乗つたのだ。

「まずは、魔王軍の実力がどれくらいなのか調べてみないと……」

「この戦い、魔王軍が勝つとでも」

ブリュンヒルドは、口をとがらせて言った。

「たぶんね。直感で感じるの…」

千夏は、自分で一番信頼が出来るのは知識でも友でもなく直観だと思つてゐる。

あと、兄貴も…

「いや、違う…」

「どうしたんですか！？」

「何でもない。何でも…」

千夏は一瞬、信頼できるのが兄貴と思い浮かんだのを慌てて否定したのだ。

「そうですか……」

ブリュンヒルドは、渋々頷いたのだ。

「それでは、兄貴の腕前を拝見しましょうか…」

千夏は、これから戦場になる辺りを見て言った。

第十一話「ある意味、指揮官に向かって立つな」

魔王軍一行は、一晩明けて新しく合流した部隊との再編成を行っていた。

「こんなもんでいいんじゃないのか？」

タクミが、リザード^{ジョージ}から編成の説明を受けて納得していた。

「エリス？いいよな？」

「はい、いいんじゃないですか？」

頭にはてなマークが浮かんで首をかしげている。

「何で、首をかしげているんだよ。いちおう魔王軍の長^{おな}だろー。」

エリスは、真実を言いたくないような顔をする。
そこで、リザード^{ジョージ}が答える。

「それは、今まで私が指揮をしていたのです。」

「それって、指揮していなかつたのか今まで…？」

タクミがエリスの方を見るとエリスはあたふたして
「だつて、今まで軍隊を指揮の仕方なんて勉強していなかつたし…
…それに…それに！」

エリスは、それに、を連呼する。

「いや、エリス様は支えてとなつてあります。」

リザード^{ジョージ}がフォローをする。

「そうなんですよー私は考えるのが苦手なんです。だから、だから
ジョージさんに任せてたんです！」

子犬のように叫ぶ。

タクミは、リザード^{ジョージ}を呼んで小声で話す。

「本当なのか？」

「本當です……エリス様は魔族の皆から守りたくなる存在らしいです。私もそうなんですが。そのために、今残っているのは、エリス様をお慕いして守りたい根性がバリバリある奴らばかりなんですよ」

「ある意味、指揮官に向いているな」

リザード^{ジョージ}が大きくうなづく

「そうなんです。」

「エリスの才能だな、守りたくさせるようなのは」

「まったくもつて」――

人が目の前でこそこそと密談しているのが気になつたエリスが大きな声で

「二人とも何しているんですか！――」

その声に、二人はビクッとして振り向いた。

「エリス様、これは必要事項を確認していたのです。」

二人は慌てて取つてつけたような言い訳をする。

「そうだ！ エリス。必要なことだつたんだ！」

タクミの中では本当に必要なことだつた。

何でエリスの元に魔族がついていくのか不思議だつたからだ。

今回の話を聞いて納得してエリスの仁徳に感心した。

「やうなんですか……どうせ私はいつも邪魔者ですよ～だ。……
・ぶつぶつ」

エリスが自己嫌悪しているのを見かねたタクミは、フォローを入れるににある。

「大丈夫だ。お前は立派な指揮官だ！……ある意味……
しまつた口が滑つた。」

「ある意味つて……ひどいすぎです」

エリスの目頭に水がたまっている。
もうすぐで決壊しそうだった。

タクミがやばいと思つていた瞬間。

「ガブツ」

「いつた／＼／＼／＼」

タクミの腕を突然がまれ何ともいえない痛さを感じた。

「誰だ…つてフェンリルか！…」

腕をかんでいるのはフェンリルだつた。

（おのれ～～～貴様！わしの娘を泣かせるとは不届き者め…やはり
亡き者しておくべきか！？ああ…）

「急にキレるな！泣かせていいだろ！…」
(問答無用！…)

さらに飛びつこうとしたのだが
「！」の野郎！調子に乗つて！…
タクミがフェンリルを振り払う。

二人は睨めあつて距離をとる。

「ガルル！」

「やつてやる！」

二人の目線で火柱が立つていると、

「あはは、二人とも面白い」

急に隣で笑い出したのはエリスだつた。

「タクミさんも犬みたい…クスクス」

お腹を抱えながら笑つている。

そんな笑つているエリスを見て二人ともケンカをするのをやめた。

そして眺めている。

楽しそうに笑つているエリスを…

「たつぐ、誰のためにやつてると思つていてるんだ！」

タクミは、内心ぼやいた。

二人と一匹のほほえましい光景に突然釘を刺された。

「大変です。人族がきました。兵力はおよそ2000後半です…！」

そいつは、息を切らしていた。

「そうか…もう来たか…この先に開けた土地でもあるか？」

「はい！ちょうど、そこで敵は陣を引いています。」

「タクミさん、やじりて出口ですよ。そこを通らないといけません。」

エリスが慌てる。

「たぶん、俺たちの場所を特定されて先回りされたな……とつあえず、抜けるにはそいつらを叩かないといけないから全軍進軍するぞ!」

タクミの言葉と共に全軍が陣形を立て直す。

その合間にエリスはタクミに訪ねる。

「タクミさん大丈夫なんですか!?」

「ああ任せおけ!」

陣形を整える。進んでいる途中

タクミはフーンリルに近寄り話しかける。

「ダーインスレイブってどう使えるんだ?」

(ダーインスレイブが答えてくれるだろう。ただし、“20%”ぐらいの力にしておけ)

20を強調させる。

「何で20なんだ?」

(100で打つと世界が持たない。)

「まじでか!?!」

タクミは驚愕の事実にビビり、とんでもない剣を手に入れたんだなと思つた。

「なるほど…それなら単純な作戦で行くか!」

(わしさ、口出しがしないがエリスを守るために何でもする。)「期待しないでおくれ!」

タクミは、作戦を考えた。進んでいくとひけた場所に出る。そこには、人族の部隊が横長く展開していた。

「俺たちを通さない気だな。」

「どうするんですが、中央突破にするんですか？」

エリスは今回の状況の打開策が浮かばなかつたのでタクミに託す。

「そうすると、囮まれてあつという間にやられるな、前に俺たちが取つた作戦と似ていいな」

「どうするんですか！？」

「大丈夫だつて」

タクミは、余裕の顔をする。

「そうですか…」

エリスは、タクミのそんな顔を見て安心するのだ。

「何かタクミさんつて、不思議だなー」

自分に向かつてささやいているエリスであつた。

第十一話「ある意味、指揮官に向かってこな」（後書き）

感想・評価など待っています。

第十一話「わ、これつを試して見ますか！」

「魔王軍。現れました。数は、およそ2000！前の戦いより増えています。」

今度も若い偵察兵だつたのだが前の顔とは違つていた。

「そうか、あの森に隠れていた兵力と合流したのか……お前は、優秀だな！お前の前任がどうなつたかは聞いておるだろ？がそうならないようにがばつてくれ！…」

「は、はい！…」

逃げるよつにして去つて行つた。

前の戦いで偵察に出ていた兵は、戦闘終了後一晩建つたら謎の死に方をしたらしい。

噂には毒薬で殺されたと言われている。

理由は簡単でしつかりと敵の配置などを調べなかつたからだらつ。

今回の偵察兵たちは必死なのだ。

そして、ゴルバを恐れていた。

偵察兵以外にも怖がつてゐる兵はたくさんいた。

ゴルバは、そんな事には気づいていなかつた。

「これで、魔王軍の命もつきたたわい。ぐはあはは！…」
兵たちの心情も知らないで、陣内で大笑いしていた。

「ゴルバ様、これならいけます。今度こそ魔王軍の奴らを亡き者にできましょ。」

グスバルは、ゴルバの事をほめていた。

しかし、袖に隠れている手が震えていた。

内心では悔しのだ。

こんな野蛮な奴に俺が負けるとはそんなことを内心で考えて、ゴルバに向かつて同意をしていた。

「千夏様！ 危険です。」

「大丈夫だつて！」

千夏とブリュンヒルドは、両軍が見渡せる位置にある山の上から見ていた。

「心配しすぎ！ たぶん両軍ともに伏兵なんていないでしょ！」

「どうしてそんなことが？」

千夏が当然かのように言つたため何でそんなことがいるのか不思議だつた。

「両軍ともに伏兵に裂ける兵力なんてないだろ？ し、兄貴も今回は伏兵に回す時間なんかがなかつたから。」

「そうですか……ですが、護衛の兵も連れてこず二一人だけでここまで来るのは少々危険なのではないでしょうか……」

周囲には、木が生い茂つており、ちよつといじだけが日の光を浴びれる場所だつた。

そこには千夏とブリュンヒルドしかいなく千夏は双眼鏡的な物で状況を確認している。

「心配しそう。私とあなたが戦えば100人ぐらいは簡単に倒せるでしょ？」

「その通りですが……」

その100人という言葉には、何にも疑問を持たなかつた。ブリュンヒルドで本人もそれぐらいはいけるだろ？と自負しているからだ。

「それにこりなら……」

千夏がそつと呟きそうになつた。

「何ですか！？」

ブリュンヒルドは、うまく聞き取れなかつたために聞きかえしたが

「何でもない。」

千夏は誤魔化したのだ。

千夏の中では、もし負けてバカ兄貴が死にそうになつても助けに行けられる位置としてこの場所を陣取つたのだがそれは、心の奥隅へと隠した。

千夏は、心配そうにでも真剣にそんなような複雑な心境で戦場を見ていたのだ。

魔王軍がゴルバの部隊と対峙した。

陣形は、相手とまったく同じだった。

距離的には、弓をうつたらギリギリ届かない絶妙な位置にいる。

「どうしますか？？」

エリスは、先ほどからJの言葉を何分かおきにはタクミに聞いている。

「さつきから、そなはつかりだな！」

いい加減うつとうしきく感じられたのかエリスに向かつて言へ。

「だつて、だつて、心配なんです！絶体絶命じやないですか！これからどうするんですか！？」

「ねちねち、ねちねち、うるさいなエリス」

「そりやあ、こんな状況じやうるをくもなつますつて！」

子犬と猿が言い争いしているようだつた。

「お一人とも静かにしてください。わが軍の士氣を悪くするかもしません。」

リザードR^{ジョージ}が突つ込む。

「すいません」

エリスは小さくなつたよつに、しゅんとなる。

それを見たリザードR^{ジョージ}は慌てて

「いや、エリス様は悪くないんですよ。Jのくたれ勇者が悪いのです。

」「Jのくたれだと…お前…言つてもいい」と悪こことがあるが…」

口をとがらせてタクミは怒る。

「一人とも落ち着いて」

何やら先ほどの風景とはガラツと立場が変わつたみたいだ。エリスが子犬のように震えているとそこに

(タクミ…わしの娘を泣かせるな…)

「ガルウ——」

いつの間にやらフエンリルがいた。

「何だ！？」のクソ狼が！！」

そう言つとフエンリルがどびかかり

「ガブツ」

「痛い、痛いってギブギブ、ってか『冗談抜きに痛い！』
かまれている腕を必死に上下させながらタクミは叫んだ。

（これで懲りたか！）

そう言つてフエンリルはまだどこかいつてしまつた。

「たつく、なんであいつは、エリスを泣かせると会わられるんだよ
！」

タクミは、かまれた腕をさすりながら言つた。

「やつと落ち着きましたか……」

「誰のせいだと思つてるんだ……！」

「ひやうう！」

タクミの大きな声にビクツとするエリス。

（お前……懲りてないようだな……）

タクミは、瞬間に殺氣を感じ取る。

その方に振り向くと目を光らせている動物がいた。

「エリス、大丈夫だ！俺に策があるから！」

怖くなつて慌てて、そういうて取り繕つに言い。

ダーインスレイブを取り出した。

「さて、こいつを試しに使って見ますか！」

剣を抜いてダーインスレイブの全貌が見える。

紫色みたいな色に、中心は黒色の線が入っている。

デザインは実にシンプルで宝石みたいなものは一切なかつた。

「これが……ダーインスレイブ……」

エリスは口をポカツと開けていた。

「ああ、行くぜダーインスレイブ。」

そして、タクミはダーインスレイブを構えた。

第十四話「私が魔王に…あなたが勇者」

タクミは、ダーインスレイブを肩におき、歩き始める。
「ちょ、ちょっとタクミさん! 魔剣を使うんですか…?」

「あ、もちろん」

タクミは歩きながら返事をする。

元々、ダーインスレイブを使うことを前提にして作戦を考えていた。
とはいっても、作戦は単純で、ダーインスレイブによるかく乱し、
そしてそのまま一斉に突撃させるという作戦だ。

作戦としては物足りないだらうがシンプルこそいい時もある。
実際の所それぐらいしか活路を見いだせないと思つてているタクミが
エリスに返事をし。

前に歩き出す。

そうすると何事かと魔族の兵たちはこちらを見てくる。

魔族の兵たちはよく見覚えのある剣を見て固まる。

それはそのはず、以前魔王が持つていた魔剣なのだから。

そして、その剣で何度も戦場を一変させてきたことを知つているからだ。

今、彼らの前には魔剣を持つて現れたタクミに釘づけになる。

「ほんまにあんな男があの剣をもつてはるのか……」

そのちょうど横には、ゴブリンAじゅんとタクミの方を見ている。

「いやー魔剣一つ持つだけでここまで様になるとは、さすがでっんなー!」

棍棒を片手に持ちながら言つ。

そして、去つていくまで視線を離せなかつた。

「ああ……タクミさん！」
骨子がいた。

どんどんタクミは進んでいった。

タクミの進んでいる先は、誰もいなかつた。

魔族たちはどうしていたのだ。

その姿に魅せられていた。

かつて、自分たちの窮地を救ってくれた魔王と重ねていたのだ。
タクミが、エリスによって勇者として召喚させられた事を知つている人は少ない。

だから、魔王がまた再来したのかと思つていて、
その姿に嬉しくて震えているのだ。

今まで魔王が死んでから、負ける一方だつた。

この戦いは自分たちで終わるのか……

そんな気持ちでいっぱいだつたのだが、ここに現れた一人の男に期待をしていた。

そう……魔王が現れたのだと。

タクミは、兵たちの一番前までくる。

そして、ダーインスレイブを持つ。

「タクミさん……なんだかかっこいいです。」

エリスの気持ちは高ぶっていた。

そして、顔が熱くなつて赤くなるのを感じた。

それがどのような心情でそうなつたのかはエリスにはわからなかつた。

「タクミ殿が昔の魔王様みたいに見えましたよ……」

リザードロは、懐かしむような顔をする。

「やつぱり、勇者じゃなくて魔王なのでは？？」

リザードロがエリスに言つ。

「いえ、確かに勇者を呼びましたよ！私たち魔王軍の勇者を……」

エリス自身勇者とか魔王の定義なんて考えたことがなかつた。

魔王とは……一般的な解釈では人に災いを与えたり、悪の道に陥れたりするのが常識なんだろつが。

エリス達魔族からして見れば救世主的な意味合いを持つている。

人は魔族を偏見し悪い奴なのだと決めつけている。

そして、それを迫害して追い出している。

実際に今までの戦いも土地を守る戦いなどが多くてそのために戦つていた。

だからと言つて人族が全部悪いわけではない。

人族もいつかはここも取られるんじゃないかといつ恐怖に蝕まれてゐる。

そうして、戦いは起るのだ。

戦争なんて言つのはやらないのが一番だと思つただがそれでも起きてしまつ。

最初はどんな小さな喧嘩でもそれがやがて国、種族を巻き込んでしまつ。

言つてしまえば国同士の喧嘩なのだ。

主義主張を旗印に戦つてゐる。

決して頑固だからとかそんななんではない。

ただ、自分の意見を通すそんな簡単なことで戦争は起きていく。

止める事なんてできないのだ。

やつして起きる戦争の中で英雄と呼ばれている人たちが出てくる。

それと同じように魔王の中では、魔王が英雄なのだ。

だから、勇者と魔王は根本的に意味は同じなのかもしない。

ただ、敵味方の違いだけなのかもしれない。

そう感じているのだエリスは……

「タクミ殿は、魔王軍の勇者ですか……それなら、エリス様には魔王になつてもらわないと……」

リザードン^{ジヨーデン}がエリスに向かつて優しく語りかける。

「私が魔王に？？」

「そうです。私たち魔王軍の救世主となるべくお方なのです。エリス様は」

「私なんかが務まるわけないじゃありませんか……」

エリスは、下を向きつつ袖をつかんでじつと黙つていた。

「エリスが軍を引っ張つていけ、そして俺がお前の頭となつて引っ張つてやるから心配するな。」

タクミが前に言った言葉を思い出した。

「私の頭になつて……引っ張つてやるか……」

そんなことを思い出して小声で一言つぶやいた。

そして、自分に向かつてしゃべった。

「私が魔王に……あなたが勇者に……」

エリスは、私が魔王という救世主になつて、タクミが魔王軍の英雄
という勇者になつて、この世界をよりよくしたいと思つた。
それは、エリスにとって初めての願いなのかもしれない。

エリスは、タクミと会つた当時は戦争なんて嫌いでみんなで平和な
場所で暮らしていけばいいと思つていたが、

現実はそんなに甘くないことをこの数日で思い知つた。

逃げても逃げても追つてくる人族の人達・・・
そして、逃げて行つた魔族の人達・・・

いろいろなことを感じた、いや、こんなことはほんの少しなのかも
しない。

だから、エリスはもつと世界を見たいと思つた。

魔王として・・・・・

「ジョージさん、私は、魔王になります。みんな、魔族として
人族の魔王……救世主になつて見せますよーー！」

「そのお言葉をお待ちしておりました。」
リザードロ^{ジョージ}が畏まるようにして臣下の礼をする。

（ようやく、決意してくれたか……わが娘よ、いや、魔王ー）
フェンリルは娘の言葉を聞いて安心したがどこかさみしくなつた。

新たに決意をしたエリスと、

嬉しく思うリザードン^{ジョージ}と、

さびしく思うフンリルと

二者違う気持ちを抱えているが

三人ともタクミの雄姿を眺めている。

第十五話「あれっ！？」

タクミが、魔王軍の最前列まで来る。

「さて、このダーインスレイブの力を見させえ貰いますか！…」
ダーインスレイブを構える。

そうするとタクミの中に何とも言えない力が流れ込んでくる。

「使い方がわかる……」

頭の中に流れ込んできたのだ。

使い方などが一瞬でわかる。

そして、力をためていく。

ちゅつとぢゅつちゅつとぢゅつ・・・。

そうでもしないと、力が暴発してしまいそうなほど魔力が流れ込んでくる。

タクミ自身、魔法なんかは使ったことはないし。

それに魔力なんてものを感じたことがなかつたのだがそれでもわかる。

これが魔力なのかと……

とっても不思議な力が流れ込んでくるのが。

タクミの額に汗が出てくる。

熱いからとかではなく。

手にして出てくる汗だ。

ダーインスレイブの制御にはものすごい集中力がいる。

今でも、ダーインスレイブを持つて立っているのがやつとなほだ。
体がふらつきかけるが
じつと耐える。

「あの、魔王はこんなものを平気で操つてたのか……バケ者だなー。」
少し魔王の事を見直してみたりしている。

周りに少しずつ魔力が漏れ始め。

地面を押しつぶす。

タクミは耐えている。

今すぐにでも倒れたいのだがプライドが許さない。
やつぱり男なら一度ぐらいはこういう経験をしたことがあるんじや
ないかな。

タクミはそう思った。

「もうそろそろかな……」

それは感覚的に分かつたことだ。

タクミ自身は集中して気づいていなようだが。

周りは魔力によってどんどんへこんでいつてい。

それを見ている魔王軍もちょっとずつは下がっているが。

それでも見とれていた。

人族の部隊も同じだつた。

何かが始まるとわかつていても、動けないでいる。

戦場が一人の男に注目する。

そして、見ていううちに迫力が増していき。

ついに時が来た。

「それじゃあ、新たなる世界への開幕と行こうか！…ダーインスレ
イブ！！」

タクミが叫び力をすべて出そうとした……のだが・・・・・

「あれっ！？」

タクミは体が斜めになつていることに気付いたのは、ダーインスレ
イブの魔力を開放した瞬間だった。

ズドオオ――――ン――――！

轟音が戦場一帯に巻き散った。

そして、タクミは尻餅をついた。

「…………え…まさか…外した！…？」

魔族は啞然としている。

驚きをあらわにしていた。

別の意味での驚きを……。

タクミのダーインスレイブの魔法は、斜め上の山に直撃していた。

いや、元山だつたところに…・・・

それを見た人族は、最前線にいた兵達が逃げ始めた。
それを見た真ん中にいた部隊なども逃げ始めた。

あるものは叫び。

あるものは武器や鎧をしてて。

走つて逃げる。

部隊は自然消滅となつた。

未だに何が起きたのかわからない。

魔王軍は、人族が逃げて行くのをただ眺めていただけだった。

「すゞいな……ダーアインスレイブ。」

タクミは、尻餅をついたまま笑った。
自分の姿がおかしくて笑つたのだ。

タクミが外しただけなのにそれを見て人族が逃げている姿が滑稽だ
つた。

人族は恐怖のあまり逃げて、魔族は呆然眺めるという面白い風景で
戦いは幕を閉じたのであつた。

エリスは、タクミが外した瞬間に。

「やつぱり、タクミさんはタクミさんですね…ふう…あはは…！」
お腹を抱えんがら笑つた。

「タクミ殿ジヨーリが外した……」

リザードDは、口を開けたままでいる。

（「はあ～～～」この先が心配だ……）

フェンリルはため息をついた。

「可おか笑しい。タクミさんが外しましたよーー！」

エリスは、明るい笑顔をする。

リザードDは、エリスのこんな笑顔を久々に見たために昔を思い出
しながら微笑んでいた。

そして、エリスは見事に外して帰つてくる勇者を待つた。

「はあ～～～～。バカ兄貴は、バカ兄貴ね」

千夏は木の上から一部始終を見た感想はたつた一言だつた。

魔王軍の中から出てきた兄貴はかつこ～～と思つてしまつたのだが。ふたを開けたらびっくりつてな感じで見事に期待に応えてくれたと、いう安心感に包まれた。

「……私つたら何を安心しているの？」

そう小声で自分につぶやいた。

そして

「撤退ね。ブリュンヒルド」

「しかし、今戦えばこちらに勝機があるのでー!?」

ブリュンヒルドは、千夏をにらみながら抗議したが。その視線をまったく無視をし

「たぶん、兵力が同じだから最終的には士氣で決まると思つから。無理ねー！」

言いきつた。

「しかし……千夏様にはエクスカリバーがあるではありませんか。」

「そんのはあつちだつて魔剣を持っているんだからお粗子よ。」

「しかしー！」

ブリュンヒルドは、内心焦つていいよつの顔をしながら反対するが・

「撤退して、オーディンに増援を貢がないと。あと、ブリュンヒルド。この判断は私が独断でしたことだからあなたには関係ない。わかつた！」

「それなら……いいでしょ……」

ブリュンヒルドは渋々頷いたのだ。

千夏は、ブリュンヒルドがオーディンの事を敬愛していることを見抜いて先ほどの言葉を言ったのだ。

自分に責任がないとわかれれば意見に賛同するだらうと気づいた。

千夏たちの部隊は何事もなかつたようにひつそりと撤退すのであつた。

一方、人族の部隊は混沌に包まれていた。

「撤退するな……あんなのはつたりだ……」

ゴルバは大声で叫んでいるのだが、

ゴルバの恐怖よりもダーインスレイブの威力の恐怖の方が勝つたのだ。

「くそつたれ……使えん兵ばかりだな……！」

ゴルバは、馬の準備をさせて撤退の準備にかかつた。

この状況では、戦うことはできないだろうと思つての決断だ。

「あの力は……」

グスバルは、魔剣の力に魅了された。

そして、感謝もした。

これで自分の番が来ると思ったからだ。

グスバルは、にやつきながら戦場から離れていく。

夕日がきれいな中でそれぞれの思惑を胸に宿したまま戦場から去つて行つた。

第十五話「あれつー!?」（後書き）

誤字脱字があつた知らせてください。

感想・評価待っています。

第十六話「俺が勇者になつて、お前…魔王を助ける…！」

太陽が山に隠れよつとした頃にタクミはエリス達のもとに帰つてきた。

「ただいま！」

手を振りながら戻つてきたので、エリスも手を振りながら

「おかえりなわ～い～！～

満面の笑みで返す。

「いや～俺の作戦通りだつた。」

「あれが、作戦！？ビックリ見ても「ケて外したよつ」としか見えなかつたんですけど…」

エリスは意地悪そつた視線でタクミを睨めよつとした。

「まあ、最終的には敵が逃げてくれたんだし、結果オーライと言つことにしておきませんか…？」

手を頭の後ろに置き誤魔化すよつて早口で言つ。

「タクミさんらしいこと言えばらしいのですけどね。」

エリスは、タクミの姿を見てそつにつた。

「タクミ殿このからどうするんですか？」

リザードン^{ジョージ}がタクミを助けるかの」とく口をはさんだ。

「ああ、そうだな…まずは一_一日_一で休憩だな！」

「一日_一ですか？？人族の部隊に襲われる可能性はないのですか？」

？

リザードロード、心配そうな顔で見てくるが

「たぶん、ダーインスレイブの力に怖気づいて攻撃はしてこないだ
ろ?」

「確かに……そうですね……タクミさんのおかげですよ……クスクス」
エリスは、口を手で押さえながら話していく。
今にも吹き出しそうな勢いだった。

「お前……一つから俺に對して皮肉を言いつけるようになったー?」

「もうひんー魔王になつてからです。」

タクミは、エリスが堂々とものを言つたことにも驚いたのだが、
何より自分の事を魔王と言つたことこびっくりする。

「魔王……って、お前どうしたんだ!?」

タクミは、ここに来た時点でエリスが少し変わったことに気付いた
のだが無視してきた。
しかし、今回の魔王発言でますます気になつた。

「それはですね……私は魔王になる決意をしたんです。」

「魔王に!?」

「はい!」

タクミは、先ほどの言葉に耳を疑っていたのだが今回はまつきと
聞こえた。

私は魔王になると・・・

「なんですか？」

タクミは、出会った当初のエリスとは信じられない変貌ぶりだった。最初はただ、平和なところで暮らしたいと言っているだけだったのに今ではそんなことを言つていらない。

「私には、夢があります。この世界を神族、魔族、人族関係なしに暮らせる。そんな世界を作ることです。そのために必要なならば私は魔王にだつてなります。」

「お前から、世界を作るなんて聞けるなんて思いもよらなかつたよ。でも。この先に待つてているのは大変なことばかりかもしれないぞ！」

？」

タクミは、覚悟を確かめるために声を大きくしていった。

「大丈夫です。だから私は決意したのです。魔王になると……」

エリスのまっすぐとした視線を感じたタクミは、頷き。

「よし、わかつた。それじゃあ、俺も勇者になつてやるよ。お前の夢をかなえるための勇者に……」

「タクミさんが勇者ですか？頼りないですわ。」

「ううせえーお前こそ魔王なんかに向いてないわ！」

「何ですか～～」

そしてどちらが先かわからないが笑い声が聞こえ始めた。二人して笑っている。

「俺が勇者になつて、お前…魔王を助ける…」
タクミ宣言する。

「はい、私も魔王になつて世界を作るために頑張ります。だから、勇者さんは頑張つて付いて来てください！」

「お前こそ、先にへこたれるなよ…」

「もちろん…」

エリスとタクミは、互いに握手をして、気持ちを確かめ合つた。

こうして、一人の少女は、世界を平和で平等とするために魔王になることを決意し。

一人の少年はその魔王を守り世界をよりよくすると宣言したのだ。

こうして、魔王と勇者が手を組んだ。

太陽が隠れかけ暗くなりつつある夕暮れ時に世界をこの後灯していく大きな光りが出来た事を知る者は誰もいない。

その後暗くなり、今度は焚火の火で明るくなつた。

（お前は調子に乗りすぎだ！）

タクミは一人草原に寝転んでいたところにフェンリルが来る。

「何だ？ フェンリル？」

（まったく、エリスが魔王になることを決意してくれたから今回の事は許してやる。）

「今回の事つて何のことだ？』

タクミは、ダーインスレイブを使つた疲れでへとへとだつた。

（まあ、いい。それよりもダーインスレイブをもうちょっと使つこなさないと宝の持ち腐れだ。）

「うつせー

タクミが寝転がつてゐる横にオオカミが座つてゐるとう奇妙な光景だつた。

（まあ、お前の気にあることでもないか。その内お前がしつかりと使えこなせる時が来るだろ。）

一言、意味深な言葉を残して去つて行つた。

タクミはフヨンリルと別れた後にエリスに呼ばれた。

そしてエリスとタクミ、軍の隊長格の人たちが集まって今後について話し合ひとこなつた。

「それで、これから、どうするんですか??」

エリスの第一声を発した。

なんともエリスらしい発言だなとタクミは思つ。

タクミは一つ疑問が出てくる。

「そういや……ここんどこじへて聞けなかつたけど、魔王つて元々領地持つてたのか?」

魔王は、あと一歩で勝ちそうなところで負けたわけだからかなりの領地を持つてゐるはずだと思つたタクミが聞く。

「はい、タクミさんには説明していなかつたと思ひますがここいら辺一帯はすべてお父様の領地だつたんですね。」

「なるほど……」

タクミは、少し間をおいて

「それじゃあ、魔王の旧領地はこの世界のどれくらいなんだ?」

「それは、五分の一です。その他にも魔族の領地はたくさんあるのですがお父様の領地は五分の一です。あと、タクミさんには言つていないことなんんですけど、北の方は、もの凄い高い山があつて行けないんです。だから、この土地は、山から南の事になりますね。」

よつあるこ、一つの大陸ではなく、北に高い山のある南の一部と言

うことだ。

まだまだ世界は広いんだなとタクミは思う。

「ニの土地の名前ってなんていうんだ?」

「ニニを、トリオスと言います。」

「トリオスね……けど、世界はまだあるんだろう? ?」

別の世界からきたタクミからしてみればニニら辺一帯では小さい過ぎる。

「たぶん……」

「地理的な状況は分かつたから、次に魔王軍の目指す目標が決ました。」

そのタクミの言葉に、魔族の隊長格の人たちがざわめきつく。

「なんですか? ?」

「まずは、旧魔王領の奪還だ!」

「なるほど、まずは、地盤固めてからですか? ?」

頭に電球が光ったエリスは納得する。

「そうだ。」

「でも、大丈夫なんでしょうか? 最近では大分、人族が入つて来ていますし、国境沿いの砦も頑丈ですよ……」

しおらしくなり言う。

「大丈夫だつて!」

「何ですか? ?」

「やつやあ」

タクミが時間を置き。

「始まり方でヒピローグが見えてくるからだ」

「ヒピローグ？」

ヒリスが首をかしげる。

「始まりが良ければだいたい、あとせつまくこぐらにもんだー。」

「やつですか？」

ヒリスは信じていなこよつた感じで首をかしげて見せるが

「やつだ！」

タクミは言こ切る。

次に魔王と勇者は、旧領地の奪還に乗り出した。

第一章 人物説明

人物説明です。

本文中に容姿、姿が詳しく書かれていなかつたので補足的に書きます。

（作者の力不足ですいません。）

両羽
りょうは
巧
たくみ

種族：異世界の人間

本作の主人公。

高校二年生で、本を読むのと料理するのが趣味。

一枚目と違うよりかは、三枚目に近い容姿。

身長、170前半。

体重、60前半

黒と茶色が混じつた髪の毛

エリナによつて召喚されて、勇者として頑張る。

魔剣、ダーインスレイブが武器。

エリス

作者から…すいません。途中、ヒリナと書かれているところがありますが、全てエリスです。

作者の完全なるミスです。お詫びいたします。修正しました。

種族：魔族？？（父は魔王だが、母は種族が不明。）

小動物系。魔王から過保護に育てられる。

身長、150前半

体重、不明

髪の毛が水色で肩より少し下まである。ますぐしてなく、途中で跳ねたりしている。

魔王軍の司令官で魔王の娘。
タクミを召喚する。

両羽 千夏

種族：異世界の人間

男勝りな性格。

タクミより一歳年下。

中学2年の夏に突然性格が変わる。

タクミは、いまだにそのことがわからていない。

身長、160前半

体重、不明

タクミの髪の毛の色と似いていて、肩にかかるない程度の短い髪の長さ。

神族に協力している。

聖剣エクスカリバーが武器。

フェンリル

種族：動物？？

エリスを過保護なまでに可愛がっていた。
エリスのためなら何でもやるという親バカぶり。

体長、1.5メートル

体重、重い

毛の色は、黒とねずみ色でお腹部分が白い。

今は、魂のみ存在していて、狼に乗り移った。

オーデイン

種族：神族

ヴァルハラ宮殿に住んでいて、神族の中でも一番偉い

身長、160前半

体重、不明

金色の髪の毛で腰辺りまで髪がある。

いろいろと謎が多い人物。

フレイヤ

種族：神族

神族の一番槍と言われている。

身長、160後半

体重、不明

赤色の髪の毛で、まつすぐとした長い髪の毛

いろいろと謎が多い人物。

ブリュンヒルド

種族：神族

オーディンの事を心から慕っている。

身長、160前半

体重、不明

髪の毛は金髪のロング

千夏の事を快く思っていない。

ゴルバ

種族：人族

勇猛果敢で直觀がするどい、ただしだびたび上官の命令を聞かないため昇格できずにいる。

身長、160後半
体重、80前半

髪の毛はない。

グスバル

種族：人族

若い士官。

自分の知略を自負して過信しすぎるがために負けることが多い。
顔のおでこあたりに手を置くのがクセ。

身長、180前半
体重、60後半

銀髪の髪の毛で方ぐりここまで長さがある。

主要人物はこんな所ですね。

次は、意外に出番があつたキャラ。

ジエンじい

種族：魔族

リツチ 一番古参の重臣。エリスの魔法の先生でもある。

ジョン

種族：魔族

ゴブリンA 下つ端 大阪弁らしく話す。

ジョージ

種族：魔族

リザードD 指揮官 参謀役を務める。

骨子

種族：魔族

スケルトンB よくバラバラになる。

魔族の兵の種類。

ゴブリン・・・武器が棍棒か弓

スケルトン・・・防御力が最弱だが、何回でも蘇る

リザード・・・頭がいい

ウィッチ・・・攻撃魔法が使える。魔法ダメージ四分の一
リッチ・・・魔法全般が使える。魔法ダメージ四分の一

あとがき

みなさん初めまして、「魔王と勇者のタクティクス」を読んでください
ありがとうございます。

一章が終わりましたが、ハーレムになつてないだろうと思つている
方もいると思います。

徐々に増えていく予定です。いや、増えますーー！

今後もよろしくお願いします。

誤字脱字、感想、評価待っています。

イラスト、レビュー等を書いてくれる方を募集しています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7366x/>

魔王と勇者のタクティクス

2011年11月9日21時31分発行